



アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリー』訳 注(6)

真下, 裕之(監修・訳注)

二宮, 文子(訳注)

和田, 郁子(訳注)

(Citation)

神戸大学文学部紀要, 45:1-44

(Issue Date)

2018

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81010197>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010197>



アブル・ファズル著 『アーイーニ・アクバリー』 訳注(6)

真下 裕之 監修
二宮 文子*、真下 裕之、和田 郁子** 訳注

<I, 82>

芳香の館の規則

王権という祝宴を飾る御方は芳しい香りを好み、それを敬神の元手と心得る。<I, 83>そして竜涎香¹や沈香²、古からの素晴らしい調合品、世界の主人たる御方の御調整品によって、神聖なる御会所 (maḥfil) はつねに薫りに満ちて、様々の姿形に作られた金銀の香炉³が薫煙を漂わす。香り高い花々が山をなして仕入れられ、花々から香油が製され、これを御身と御髪に塗りつける。

【以下では】心惹かれる数多の調合品が列挙され、幾ばくかの説明によって言葉に色と香りを与えた⁴。

* 青山学院大学文学部准教授

** 岡山大学大学院社会文化科学研究科助教

1 竜涎香 (‘anbar) については [AA: I, 91-92] に後述 (本訳注 14-15 頁)。(M)

2 沈香 (‘ūd) については [AA: I, 94-95] に後述 (本訳注 20-22 頁)。(M)

3 香炉の実例として北インドに帰されるものは真鍮製が多くを占める [Zebrowski 1997: 120-129]。イランに帰される真鍮製香炉が金銀鍍金を施されている実例を考慮すると [Meyer 2015: 32-33]、本文の「金銀の」とは、香炉の材質ではなく、その色を指したものと考えておきたい。(M)

4 次頁以降、サントウクからガスールに至る香料のレシピは、Šāh Ġāhān 時代に著された BKh に引用されている [BKh: 5r-7r]。(M)

BKh では、他にも「王のサントウク (santūk-i šāhī)」など 6 種類のレシピが挙げら

サントウク（スイーンのファトゥハ、隠れたヌーン、上双点付きターのダ
ンマ、ワーウのスクーン、カーフ） じゃ香⁵1 1/2 トールチャ、チャウワー⁶1 トー
ルチャ、チャンベリー⁷油2 マーシャー、薔薇水2杯を用いて製され、御身に
塗られる。

アルガジャー⁸（ハムザのファトゥハ、ラーのスクーン、ペルシア語のカー
フとジームのファトゥハ、書かれただけのハー） 白檀⁹3/4 スィール、イク
スィール¹⁰とミード¹¹2 トールチャ、チャウワー3 トールチャ、スマレの根 (bīḥ-i
bunafšah) 1 トールチャ、ゲーフラー（ペルシア語のカーフのエー発音カスラ、
下双点付きヤーのスクーン、ハー、ラームのファトゥハ、書かれただけのハー）
——これはある植物の種である——1 トールチャ、樟脳¹²1 1/2 マーシャー、薔薇
水11杯を用いて製され、夏の間は御身にこれを塗る。

グルカマー¹³（ペルシア語のカーフのダンマ、ラームのスクーン、カーフ、
アリフ、ミームのファトゥハ、書かれただけのハー） 白竜涎香1 トールチャ、
ラーダン¹⁴1 1/2 トールチャ、選りすぐりのムスク2 トールチャ、厳選された沈香4

れている [BK^h: 74v-75v]。 (N)

5 zabād. じゃ香ネコから採れる香料。じゃ香については [AA: I, 93-94] に後述（本訳
注18-19頁）。 (M)

6 チャウワーについては [AA: I, 95] に後述（本訳注22-23頁）。 (M)

7 チャンベリーについては [AA: I, 96] に後述（本訳注26頁）。 (M)

8 アルガジャー (argaḡah) については、*Aḥwāl-i Asad Beg* の中で、著者 Asad Beg が17
世紀初頭の Biḡāpūr のアーディル・シャーヒー朝宮廷で見聞した šab-i barāt の祭礼で供
された物品の一つとして言及されている [AAB: 21r]。 (M)

BK^h では、「ベーガム・サーヒブのアルガジャー」など13種類のレシピが挙げられて
いる [BK^h: 12r, 79r-82r]。 (N)

9 白檀 (śandal) については [AA: I, 95] に後述（本訳注23-24頁）。そこに記されてい
るとおり、Ġahāngīr は白檀が「園林で栽培されて」いることを伝えている [JN (T): 5;
JN (A) : 3]。 (M)

10 iksīr は既出の箇所では「妙薬」と訳された語であるが [AA: I, 35, 39; AA (Jtr.): (2): 109;
AA (Jtr.): (3): 114]、この文脈では明らかに何か特定の芳香剤を指している。詳細は不明。
(M)

11 MYD. これを mīd と読むこととその根拠については [AA (Etr.): I, 85, n. 1]。本訳注も
これに従った。ミードについては [AA: I, 94] に後述（本訳注19頁）。 (M)

12 樟脳 (kāfūr) については [AA: I, 92-93] に後述（本訳注16-18頁）。 (M)

13 gulkāmah. BK^h では4種類のレシピが挙げられている [BK^h: 86v-87r]。 (N)

14 lādan. ラーダンについては [AA: I, 92] に後述（本訳注15-16頁）。 (M)

トールチャ、アビール・イクスィール¹⁵ トールチャを粉末にして、焼き物¹⁶の皿に盛り、赤い薔薇1スィールから汁を搾って、それに混ぜる。そして太陽の熱で乾燥させ、夕刻になったら薔薇水とバハール液¹⁷で湿らせ、斑岩¹⁸の上で【最初の工程と】同じ程度に砕く。このような手順で十日が過ぎたら、オレンジのバハールの搾り汁に混ぜて、【さらに十日】乾燥させる。この二十日間のうちに何度か黒バジル¹⁹——これは黒いナーズブーと呼ばれている——の搾り汁少々を混ぜ合わせる。アルガジャーにこれを少々加えて用いる。

ルーフ・アフザー²⁰ 沈香5スィール、白檀1¹/₄スィール、ラーダン1¹/₄

15 iksīr-i 'abīr. 字義上は「竜涎香の妙薬」を意味するが、具体的にいかなる香料であるかは不明。後出する 'abīr iksīr (本訳注6頁)に同じと解したので、同一の用語をあてた。(M)

16 čīnī. これが磁器、陶器のいずれであるかを判別したいので「焼き物」と訳した。もちろん、中国製磁器の遺物が14世紀トゥグルク朝の宮殿遺構 (Firuz Shah Kotla) から発見されており [Smart 1975-1977]、ムガル帝国の最初期に属するブラーナー・キラーの遺構、および Akbar 時代に属する Fathpūr Sīkrī の遺構からも中国製磁器の遺物が報じられている [Lal (ed.) 1973: 5; Brand & Lowry (eds.) 1985: 115-116; 辛島 1988: 2]。さらにムガル帝国君主の名を刻した中国製磁器の完品も知られているが [Das 1991-1992: 390-393]、本文のごとく香料の調合に磁器が用いられたことの証拠は得られない。(M)

17 'araq-i bahār. オレンジの花のアロマを意味するが [Steingass 1892: 844b]、Blochmann はこの語句を the extract of the flower called Bahār と、バハールという特定の花の抽出物と解している [AA (Etr.): I, 79]。bahār はオレンジの花のみならず、カモミールの花をも意味する [Steingass 1892: 209b; Dihhūdā: bahār]。さらに後出する「オレンジのバハール」bahār-i nārang という成句 [AA: I, 84; 本訳注3, 4頁] は、bahār 即オレンジの花とならないことをうかがわせる。それゆえこの文脈では「バハール」をいずれとも定めがたいため、訳さず音写を示すにとどめた。(M)

18 sang-i sumāq. 「斑岩」の訳語は [黒柳 2002: 960] に従う。本書の意図した石材は、この鉱物学上の名称とは別に考慮されるべきだが、詳細は不明。英訳の補注者 Phillott は「最も固い種類の大理石」と解しているが、その根拠は不明である [AA (Etr.): I, 79, n. 3]。(M)

19 rayhān-i siyāh. rayhān は sweet basil を意味する [Steingass 1892: 601a]。またナーズブー nāz-bū は字義上「柔らかな香り」を意味するとともに特定の植物の名称 (めぼうき [黒柳 2002: 1804a]。The herb *ocymum pilosum* [Steingass 1892: 1371b]) でもある。(M)

20 rūh-afzā. 字義上「生気を与える (もの)」を意味する。BK h には「膏薬」marham を扱う第3部のなかで列挙された「強壮剤」mufarriḥ のレシピの一つとして「Ḥakīm 'Alī Gilānī gaḥakīm Abū al-Qāsim から受け継いだ生気を与える力の強壮剤 (mufarriḥ-i quwwat-i rūh-afzā) のレシピ」が見える [BK h: 60v]。この前後には「Ḥakīm 'Alī gaḥakīm Abū al-Qāsim の要録から受け継いだ処方にもとづく陽気さを与える (niṣāṭ-afzā) 強壮剤」[BK h: 57v]、「Ḥakīm Masīḥ al-Zamān の元気を与える (dīl-afzā) 強壮剤のレシピ」[BK h: 61v] などが見えることを考慮すると、本書の「ルーフ・アフザー」もこのような混合香料の固

スィール、イクスィールと乳香²¹とドゥープ²²——これはカシュミールからもたらされる根である——それぞれ3 1/2 トールチャ、<I, 84> スミレの根20 トールチャ、ウシュナ²³——これはヒンド語でチャリーラー²⁴（ペルシア語のジームのファトゥハ、隠れたハー、ラーのカスラ、下双点付きヤーのスクーン、ラームのファトゥハ、書かれただけのハー）という——10 トールチャを、すべてを堅めるために氷砂糖をシロップにして混ぜ合わせ²⁵、薔薇水4杯を注ぐ。これを円盤状にして、香炉で焚く。まことに選りすぐりのものである。

オープタナー²⁶（ハムザのオー発音ダンマ、ワーウとペルシア語のバーのスクーン、上双点付きターとヌーンのファトゥハ、書かれただけのハー）薫り高い手洗剤（*dast-šū*）である。ラーダン2 3/4 スィール、沈香1 1/2 スィール5 ダーム、オレンジのパハール1 1/2 スィール5 ダーム、オレンジの皮1 1/2 スィール、白檀1 スィール10 ダーム、香りカンショウ²⁷——ヒンドの人々はこれをチャ

有名の一つであったのかもしれない。（M）

²¹ 乳香 (*lūbān, lubān*) については [AA: I, 96] に後述（本訳注25頁）。（M）

²² *dhūp*. ヒンドゥー教徒が礼拝時に神像に供える薫香とその燻煙 [古賀・高橋 2006: 696a]. *Incense, frankincense; any fragrant gum or resin* [Platts 1884: 550a]. なおドゥープはムガル帝国において、君主からの下賜品の一つであったらしい。史料には、ヒルアとともにドゥープが下賜される例が散見される。受贈者が必ずしもヒンドゥー教徒ではないことを考慮すると、この語とこの香料が、元来備えていた宗教的意味とは別に、宮廷儀礼の中に吸収されたものと見なせるかもしれない [BNL: II, 229, 235; MAI: 454]. （M）

²³ *uṣṇah*. 「苔」を意味するペルシア語であるが、ここでは香りを発する特定の種類の苔を意味しているはずなので、原語を示すにとどめた。次注も参照。（M）

²⁴ *čharīlā. Spikenard* (カンショウ); *a kind of fragrant moss* [Platts 1884: 462a]. なお後出の一覧表では、チャリーラーと同義のペルシア語として、ドゥワラク (*duwālak*) が挙げられている（本訳注8頁）。ドゥワラクは本文の別の箇所にも後出する（本訳注5頁）。（M）

²⁵ *bi-ṣaḥṭah-gī hamah nabāt rā bi-qawām awardah*. Blochmannはこの箇所を「シロップのように粘り気が出るまで押し固める」と解している [AA (Etr.): I, 79]. なお底本では *bi-ṣaḥṭah-gī* に疑問符が付され、テキストそのものに疑問の余地があることを示唆しているが、諸写本には異文がなく、本文を訂する根拠を得られないので底本のテキストのまま解釈した。（M）

²⁶ *ōptanā*. この語およびこの名称の香料については詳細不明である。（M）

²⁷ *sunbul al-ṭib. A species of spikenard, Nardostachys jatamansi* [Platts 1884: 680a]. かのこそう [黒柳2002: 964a]. （M）

sunbul は、カンショウあるいは甘松香（カンショウの根茎から採る香料）。Ibn al-Bayṭār は、Ibn al-Šarīf によると *sunbul* には *Hindī*、*Rūmī*、*Čabalī* の3種類があり、その

ル（ペルシア語のジームのファトゥハ、隠れたハー、ヒンド語のラーのスクーン）と呼ぶ——1 スィール5 ダーム、ウシュナ1 スィール5 ダーム、ムスク 38 $\frac{1}{2}$ トールチャ、パーチャ²⁸の葉 $\frac{1}{2}$ スィール4 トールチャ、リング36 トールチャ、スウド²⁹——これはヒンド語でモート³⁰（ミームのオー発音ダンマ、ワーウのスクーン、上双点付きター、隠れたハー）と呼ばれる——11 トールチャ、スマレ5 ダーム、ドゥープ1 トールチャ2 マーシャー、イカンキー³¹（ハムザのカスラ、カーフのファトゥハ、ヌーンのスクーン、カーフのカスラ、下双点付きヤーのスクーン）——特別な植物である——1 $\frac{1}{2}$ トールチャ、そしてズルンバード³²——カチュール³³と呼ばれる——1 $\frac{1}{2}$ トールチャ、乳香1 トールチャ2 マーシャー、薔薇水106 杯、バハール液5 杯を用いて製される。材料全部を碎き、ふるいにかけて、薔薇水に投入して弱火で加熱し、水分が少なくなったら火から下ろして乾燥させる。

アビール・マーヤ³⁴ 沈香4 ダーム、白檀2 ダーム、スマレの根1 ダーム、香りカンショウ3 $\frac{1}{2}$ ダーム、ドゥワラク³⁵3 ダーム、ヒタイのムスク4 トールチャ、

うちの Hindī が *sunbul al-ṭīb* あるいは *al-aṣāfir* とも呼ばれると述べる [JM: III, 36-37; Lev & Amar 2008: 289-293]。また FJ に、「巻き毛に似た姿の葉草の一種。香りがよく香料類に用いられる。アラビア語で *sunbul al-ṭīb*、ヒンド語で *char* と呼ばれる」との記述がある [FJ: II, 1841]。なお、カンショウを意味するヒンディー語として *char* ないし *chār* の語がある [Platts 1884: 456a, 461b]。(W)

28 PAČH. Ms. A は MAČH と作るが [AA Ms. A: 37v]、いずれにせよ不詳。Blochmann は訳語を与えずに *pācha* との音写のみを記している [AA (Etr.): I, 79]。本訳注もさしあたりこれに従ったが、詳細は不明である。(M)

29 *su'd. Galangale* [Steingass 1892: 682b]; かやつりぐさ [黒柳 2002: 943a]。(M)

30 ヒンディー語の単語 *mōthā* にあたるか。A kind of grass, *Cyperus rotundus*; and its root (which is used in medicine, and for perfume) [Platts 1884: 1086a]。カヤツリグサ科ハマスケ *Cypertus rotundus* [古賀・高橋 2006: 1109b]。(M)

31 *ikankī*。この語およびこの名称の植物については詳細不明である。(M)

32 *zurunbād*。がじゅつ [黒柳 2002: 854b]。Zedoary, a Chinese root [Steingass 1892: 616a]。(M)

33 *kačūr*。ショウガ科草本ガジュツ *Curcuma zedoaria* [古賀・高橋 2006: 180b]。The plant or root zedoary, *Curcuma zerumbet* [Platts 1884: 819a]。(M)

34 'abir māyah. [BKH: 82v-84v] において詳しい製法が説明されている。(N)

35 *duwālak*. A species of fragrant creeper [Steingass 1892: 540a]。duwālah (地衣、こけ) に同じ [黒柳 2002: 743b]。duwālah は「芳香のある物質の一種」[FBS: IV, 3364b]。(M)

ラーダン2¹/₂ダーム、オレンジのバハール7¹/₂ダームを砕き、ふるいにかけて、薔薇水10杯に投入して弱火で加熱し、日陰で乾燥させる。

キシタ³⁶ 沈香24トルチャ、ラーダン6トルチャ、乳香6トルチャ、白檀6トルチャ、イクスィール4トルチャ、ドゥープ4トルチャ、スマレの根2トルチャ、ムスク2トルチャ、ウシュナ1トルチャを、氷砂糖50トルチャ、薔薇水2杯に投入して弱火で加熱し、円盤状に堅める。これを燃やすと薫りが高くあがり、心を躍らせる。<I, 85>

バフル³⁷ 沈香1スィール、白檀1スィール、ラーダン1/4スィール、ムスク2トルチャ、イクスィール5トルチャを、氷砂糖2スィール、薔薇水1杯に投入して弱火にかけて混ぜ合わせる。

ファティーラ³⁸ 沈香5スィール、白檀72トルチャ、イクスィールおよびラーダン25トルチャずつ、スマレ25トルチャ、乳香10トルチャ、氷砂糖3トルチャをふるいにかけて、薔薇水2杯に混ぜてファティーラを製する。

バールジャート³⁹ 沈香1スィール、ラーダン5トルチャ、ムスクおよび白檀それぞれ2トルチャ、乳香1トルチャ、樟脳¹/₂トルチャを、チャウワーと同様に滴下させる。

アビール・イクスィール⁴⁰ 白檀³/₄スィール、イクスィール26トルチャ、ムスク2トルチャ8マーシャーを挽き合わせ、日陰で乾燥させてから用いる。

ガスール⁴¹ 白檀35トルチャ、カトル⁴²17トルチャ、ムスクおよびチャ

36 kištah. BKhでは6種類のレシピが挙げられている [BKh: 89r-91r]。(N)

37 baḥūr. [BKh: 91v] に他のレシピが挙げられている。(N)

38 fatīlah. BKhでは、「上質の沈香のファティーラ (fatīlah-i agar-i a'lā)」など6種類のレシピが挙げられている [BKh: 87r-89r]。(N)

39 bārgāt. この語におよびこの名称の香料については詳細不明である。読み方は Blochmannに従ったが、確証はない [AA (Etr.): I, 80]。(M)

40 'abīr iksīr. 前注15を参照。(M)

41 ḡasūl. 字義上「洗浄するためのもの」を意味し、Blochmannはa liquid soapと解するが、具体的にいかなる香料であるかは不明。(M)

42 底本はKTWLとあるが、Ms. AはKTWLとする [AA Ms. A: 37v]。本訳注では辞書に在証できる後者に従った。katōl: a species of plant, *Trichosanthes diæca*, or perhaps *Dolichos pruriens* [Platts 1884: 815b]。(M)

ウワー1トールチャずつ、樟脳とミード2マーシャーを薔薇水2杯と混ぜて製する。

<I, 85-86>

芳香	
名前	価格
白竜涎香 ('anbar-i ašhab)	1トラーあたり1ムフルから3ムフル
じゃ香 (zabād)※ ⁴³	1/2ルピーから1ムフル
ムスク (mušk)	1ルピーから4 1/2ルピー
沈香 ('ūd)。ヒンド語ではアガル (agar) ⁴⁴ ※	1スィールあたり2ルピーから5ムフル
チャウワー (čawwah)※	1トラーあたり1/8ルピーから1ルピー
ガウラー (gawrah)※	1トラーあたり3ルピーから5ルピー
ビーム・セーン樟脳 ⁴⁵ (kāfūr-i Bhīm-Sēnī)	3ルピーから2ムフル
ミード (mīd)※	1ルピーから3ルピー
サフラン (za'farān)※	1スィールあたり12ルピーから22ルピー
カマンディー・サフラン (za'farān-i Kamandī) ⁴⁶	1ムフルから3ムフル
カシュミール産サフラン (za'farān-i Kašmīrī)	8ルピーから12ルピー
白檀 (ṣandal)※	1マンあたり32ルピーから55ルピー
ムスクの囊 (nāfah-i mušk)	1スィールあたり3ムフルから12ムフル
カランバク (kalanbak) ⁴⁷ ※	1マンあたり10ルピーから40ルピー

43 以下、名称の後に「※」を付した香料については、この一覧表に後続して底本91頁（本訳注14頁）以下に、個別の詳説がある。(M)

44 後出する発音の説明に従い、agarと読む。ただしヒンディー語においてはagurとの読み方もあり、こちらの方がサンスクリット語のaguruに近い。なおこの一連の一覧表に列挙されている香料、花の名称のうち、『チャラカ・サンヒター』に見えるのは、この沈香 (aguru) を含め、白檀 (candana)、カダム (kadamb)、ナーグ・ケーサル (nāgakesāra)、マラーティー (mālātī) の5例に過ぎない [矢野 1988: 293-338]。(M)

45 ビーム・セーン樟脳については [AA: I, 93] に後述（本訳注18頁）。当該箇所では「ビーム・セーニー」とある。(M)

46 Blochmannの読みに従ってさしあたりKamandīとしたが、その根拠は不明である [AA (Etr.): I, 80]。後続する「カシュミール産サフラン」と対比すると、産地を示したのかとも考えられるが、サフランを産するKamandなる土地については不明である。(M)

47 底本はKLBK, KLYNK, KLBKの異読を示した上で、本文を確定できていない。諸写本もKLBK [AA Ms. A: 38r], KLBK [AA Ms. B: 45r] とテキストが揺れており、この語が難読語であったことをうかがわせるが、後注97のごとく、カランバク kalanbakと読むことができる。(M)

芳香 (続)	
名前	価格
スィラーラス (silāras)※	1 スィールあたり 3 ルピーから 5 ルピー
ラーダンの竜涎香 ('anbar-i lādan)	1 1/2 ルピーから 4 ルピー
粒の樟脳 (kāfūr-i čīnah)	1 ルピーから 2 ルピー
フィットナのアラク ('araq-i fitnah)	1 杯あたり 1 ルピーから 3 ルピー
ムスクの柳のアラク ⁴⁸ ('araq-i bīd-i mušk)	1 杯あたり 1 ルピーから 4 ルピー
薔薇水 (gul-āb)	1/2 ルピーから 1 ルピー
バハール液 ('araq-i bahār)	1 ルピーから 5 ルピー
チャンベリーのアラク ('araq-i čanbēlī)	1/8 ルピーから 1/4 ルピー
スマレの根 (bīḡ-i bunafšah)	1 スィールあたり 1/2 ルピーから 1 ルピー
香りアズファール (azfār al-ṭīb)※	1 1/2 ルピーから 2 ルピー
グジャラートからもたらされるマージュの葉 (barg-i māḡ) ⁴⁹	1/2 ルピーから 1 ルピー
スガンド・コーキラ (sugandh ⁵⁰ kōkilā)※	10 ルピーから 13 ルピー
SRGRD 産乳香 (lūbān az SRGRD ⁵¹)	1 トーラーあたり 1/3 ルピーから 3 ルピー
その他の乳香	1 スィールあたり 1 ルピーから 2 ルピー
カンショウ (ālak ⁵²)。ヒンドの言葉ではチャル (čhar)	1/4 ルピーから 1/2 ルピー
ドゥワラク (duwālak)。ヒンド語ではチャリーラー (čharīlā) と呼ばれる	3 ダームから 4 ダーム
ゲーフラー (gēhlah)	
スウド (su'd)	
イカンキー (ikankī)	
ズルンバード (zurunbād)	

48 bīd-i mušk はイスファンド月末に香り高い花をつける柳の一種で [FBS: II, 1131]、*Iršād al-Zirā'ah* にはこれから製するアラクについて言及がある [IZ: 252]。(M)

49 māḡ について、詳細は不明である。(M)

50 底本は *sukandh* だが、*sugandh* に改めた。詳しくは後注 103 を参照。(M)

51 SRGRD は地名であると考えられるが不明。Blochmann も "from Sargard?" と読んでいるが、確実な解釈を与えてはいないので採らなかった [AA (Etr.): I, 81]。(M)

52 底本は *alak* と作り、Blochmann も *Alak* と読み [AA (Etr.): I, 81]、諸写本も同様であるが、カンショウを意味する *ālak* に本文を正した。前注 24 および 27 も参照。(M)

<I, 86-88>

芳香 補遺 ⁵³			
名前	読み	色	旬
セーウティー (sēwtī) ※	スィーンのエー発音カスラ、下双点付きヤーとワーウのスクーン、上双点付きターのカスラ、下双点付きヤーのスクーン	草色	通年。雨期の終わりに多作。
チャンペリー (čanbēlī) ※	ペルシア語のジームのファトゥハ、隠れたヌーン、バーのエー発音カスラ、下双点付きヤーのスクーン、ラームのカスラ、下双点付きヤーのスクーン	白、黄色、青	雨期。一部は冬。
ラーイ・ベール (rāy-bēl) ※	ラー、アリフ、下双点付きヤーのカスラ、バーのエー発音カスラ、下双点付きヤーとラームのスクーン	月光色	夏の終わりと雨期の初め
モーンガラー (mōngarā) ※	ミームのオー発音ダンマ、ワーウのスクーン、隠れたヌーン、ペルシア語のカーフとラーのファトゥハ、アリフ	黄色	夏
チャンパー (čanpah) ※	ペルシア語のジームのファトゥハ、隠れたヌーン、ペルシア語のバー、書かれただけのハー	黄色	一年を通して開花するが、双魚宮、宝瓶宮の時期に多作。
ケートウキー (kētukī) ※	カーフのエー発音カスラ、下双点付きヤーのスクーン、上双点付きターのダンマ、カーフのカスラ、下双点付きヤーのスクーン	上方の葉は緑で、内側は黄色みがあった白	夏
ケーヴァラー (kēwarah) ※	カーフのエー発音カスラ、下双点付きヤーのスクーン、ワーウとラーのファトゥハ、書かれただけのハー		獅子宮から天秤宮の終わり
チャルター (čaltah) ※	ペルシア語のジームのファトゥハ、ラームのスクーン、上双点付きターのファトゥハ、書かれただけのハー		

⁵³ 以下は、本文にあるとおり、花についての説明であるから、この表題は「芳香」の「補遺」として、芳香ある花を列挙したものと解せる。(M)

芳香 補遺 (続)			
名前	読み	色	旬
グラール (gulāl ⁵⁴)	ペルシア語のカーフのダンマ、ルーム、アリフ、ルームのスクーン		春
グラールのタスビーフ (tasbīḥ-i gulāl ⁵⁵)※	上双点付きターのファトゥハ、スイーンのスクーン、バーのカスラ、下双点付きヤーのスクーン、ハー、ペルシア語のカーフのダンマ、ルーム、アリフ、ルームのスクーン	白	冬
スィンガールハール (singār-hār)※	スイーンのカスラ、隠れたヌーン、ペルシア語のカーフ、アリフ、ラーのスクーン、ハー、アリフ、ラーのスクーン	小さい白い 花卉を有する。	夏
ボールサリー (bhōlsarī)※	バーのオー発音ダンマ、隠れたハー、ワーウとルームのスクーン、スイーンのファトゥハ、ラーのカスラ、下双点付きヤーのスクーン	草色	雨期
クーザー (kūzah)※	カーフのダンマ、ワーウのスクーン、点付きザーのファトゥハ、書かれただけのハー	白	夏
パーダル (pādal)※	ペルシア語のバー、アリフ、ワーウのスクーン、ハーのカスラ、下双点付きヤーのスクーン	ユリ色	春
ジューヒー (ḡūhī)※	ジームのダンマ、ワーウのスクーン、ハーのカスラ、下双点付きヤーのスクーン	白と黄色。 ジャスミンに似ている。	雨期
ニワーリー (niwārī)※	ヌーンのカスラ、ワーウ、アリフ、ラーのカスラ、下双点付きヤーのスクーン	草色	春
水仙		白	春
スマイレの花		スマイレ色	夏

54 gulālはホーリーの祝祭で用いられる色粉を意味するヒンディー語の単語であるが、これがいかなる花の名称であったのかは不明である。なおオールドに設けられた赤色の布を張った帳がgulāl-bārと呼ばれたことは本書に既出である [AA: I, 41; AA (Jtr.) (3): 116-117, n. 12]。(M)

55 tasbīḥは「数珠」を意味するペルシア語であるが、花の名称との関係は不明である。また本書の発音解説はインド語由来の単語にしか付されないのが通例なので、この単語について解説があるのは不思議である。(M)

芳香 補遺 (続)			
名前	読み	色	旬
カルナー ⁵⁶ (karnā) の花	カーフのファトゥハ、ラーのスクーン、ヌーンのファトゥハ、書かれただけのハー	白	春
カプール・ベール (kapūr-bel) ※	カーフのファトゥハ、ペルシア語のバーのダンマ、ワーウとラーのスクーン、バーのエー発音カスラ、下双点付きヤーのスクーン、ラーム		
サフランの花※		スマレ色	秋

<I, 89-91>

色彩の良い【花】			
名前	読み	色	旬
ヒマワリ (gul-i āftāb) ※		黄色	
カンワル (kanwāl) の花※	カーフのファトゥハ、隠れたヌーン、ワーウのファトゥハ、ラームのスクーン	白。青にもなる。	雨期
ジャアファリー (ḡa'farī) ※		金色がかった黄色、オレンジ色、干し草色	春
グドゥハル (gudhal) ※	ペルシア語のカーフのダンマ、ヒンド語のダールのスクーン、ハーのファトゥハ、ラームのスクーン	その花卉の色は、赤、黄色、オレンジ色、白など様々である。	雨期
ラタン・マンジャニー (ratan-manjanī) ※	ラーと上双点付きターのファトゥハ、ヌーンのスクーン、ミームのファトゥハ、隠れたヌーン、ジームのファトゥハ、ヌーンのカスラ、下双点付きヤーのスクーン	燃えるような赤で、ジャスミンより小さい	通年
ケースー (kēsū) ※	カーフのエー発音カスラ、下双点付きヤーのスクーン、スィーンのダンマ、ワーウのスクーン		夏

56 カルナーは「甘酸っぱい果物」の一つとして既出である [AA: I, 80; AA (Jtr.) (5): 80, n. 126]。(M)

色彩の良い【花】(続)			
名前	読み	色	旬
カネール (kanēr)※	カーフのファトゥハ、ヌーンのエー 発音カスラ、下双点付きヤーとラー のスクーン	赤と白	
カダム (kadam)※	カーフとダールのファトゥハ、ミーム のスクーン	外側は緑で、中央は黄色、内側のしべは白	春
ナーグ・ケーサル (nāg kēsar)※	ヌーン、アリフ、ペルシア語のカーフ のスクーン、カーフのエー発音カスラ、 下双点付きヤーのスクーン、スィーンの ファトゥハ、ラーのスクーン		春
スルパン (surpan)※	スィーンのダンマ、ラーのスクーン、 ペルシア語のバーのファトゥハ、ヌーン のスクーン	白。内側には赤と黄色の線がある。	雨期
スイリー・カンディー (sirī khandī)※	スィーンとラーのカスラ、下双点付き ヤーのスクーン、カーフのファトゥハ、 隠れたハー、隠れたヌーン、ヒンド語 のダールのカスラ、下双点付きヤーの スクーン	白。内側は黄色がかっており、外側は赤色がかっている。	春
ヘンナー (ḥinnā) の花 ※			
ドゥーパフリヤー (dū-pahriyā)※	ダールのダンマ、ワーウのスクーン、 ペルシア語のバーのファトゥハ、ハーの スクーン、ラーのカスラ、下双点付き ヤー、アリフ	燃えるような赤と白	通年
ブーン・チャンパー (bhūn-čanpā)※	バーのダンマ、隠れたハー、ワーウと ヌーンのスクーン、ペルシア語のジーム のファトゥハ、隠れたヌーン、ペルシア 語のバー、アリフ	桃色	
スダルサン (su-darsan)※	スィーンのダンマ、ダールのファトゥハ、 ラーのスクーン、スィーンのファトゥハ、 ヌーンのスクーン	黄色。蓮の花に似ているが、それよりも小さい。	雨期
セーンバル (sēnbal) ※	スィーンのエー発音カスラ、下双点付き ヤーのスクーン、隠れたヌーン、バーの ファトゥハ、ラームのスクーン	暗赤色	春
ラタン・マーラー (ratan-mālā)※	ラーと上双点付きターのファトゥハ、 ヌーンのスクーン、ミーム、アリフ、 ラーム、アリフ	黄色	春

色彩の良い【花】(続)			
名前	読み	色	旬
スーンザルド (sūnzard)※	スィーンのダンマ、ワーウとヌーンのスクーン、点付きザーのファトゥハ、ラーとダールのスクーン	黄色	春
マールティー (mālī) の花※	ミーム、アリフ、ラームのスクーン、上双点付きターのカスラ、下双点付きヤーのスクーン		
カルン・プール ⁵⁷ (karn phūl)	カーフのファトゥハ、ラーとヌーンのスクーン、ペルシア語のバーのダンマ、隠れたハー、ワーウとラームのスクーン	金色がかった黄色	
カリール (karīl)※	カーフのファトゥハ、ラーのカスラ、下双点付きヤーとラームのスクーン		春
ジャイト (ġayt)※	ジームのファトゥハ、下双点付きヤーと上双点付きターのスクーン	内側は黄色、外側は黒がかった赤	雨期
チャンパラー (čanpalah)※	ペルシア語のジームのファトゥハ、隠れたヌーン、ペルシア語のバーとラームのファトゥハ、書かれただけのハー	白。レモンの花に似ている。	春
ラーヒー (lāhī)※	ラーム、アリフ、ハーのカスラ、下双点付きヤーのスクーン		双魚宮の時期に開花する。
カラウンダー (karawndā) の花※	カーフとラーのファトゥハ、ワーウのスクーン、隠れたヌーン、ダールのファトゥハ、書かれただけのハー	白。チャンペリーより小さい。	雨期
ダナンタル (dhanantar)※	ダールのファトゥハ、隠れたハー、ヌーンのファトゥハ、隠れたヌーン、上双点付きターのファトゥハ、ラーのスクーン	蓮の花に似ている。	雨期

⁵⁷ 字義上は「耳 karn」の「花 phūl」を意味し、karn-phūlは耳飾りを意味するが〔古賀・高橋 2006: 204a; Platts 1884: 828a〕、この語がいずれの花の名称であるかは不明である。
(M)

色彩の良い【花】(続)			
名前	読み	色	旬
スィルス (sirs) ⁵⁸ ※	スィーンのカスラ、ラーとスィーンのスクーン	黄色がかかった緑で、しべを備えている ⁵⁹ 。	春
カングライー (kanglāī)※	カーフのファトゥハ、隠れたヌーン、ペルシア語のカーフ、ラーム、アリフ、下双点付きヤーのカスラ、下双点付きヤーのスクーン	赤と黄色の二種類がある。	
サン (san)※	スィーンのファトゥハ、ヌーンのスクーン	黄色	雨期

【芳香の発現の規則】⁶⁰

竜涎香 海底に生えており、水棲生物がそれを食し、満腹になると吐き出す、と述べる人々もいる。魚が【竜涎香を】食べて死に、その腹から取り出される、と述べる人々が多い。海の牛 (daryāī gāw) の糞 (サーラー (sārā) と呼ばれる) であると考える人もいれば、海の泡であると考える人々もいる。島々の山岳地帯から滲出するという意見の人々もいる。海の樹木 (daryāī diraht) の樹脂と見なす人々もいる。ロウだと思う人々も少数いて、この驚くべき書物の著者【アブル・ファズル】はこれに近い推測をしている。一部の山々では、豊富な蜂蜜が産出される。流れ出して海に達するほどである。ロウは浮き上がってきて、太陽光で乾燥する。蜂の食べるものは香りのよい植物なので、芳香が増

58 底本の一覧表は以下、カングライー、スィルスの順だが、諸写本に従い、スィルス、カングライーの順に改めた [AA Ms. A: 38v; AA Ms. B: 45v; AA Ms. C: 34r]。(M)

59 底本ではこの説明文の末尾に誤植があるため、文が破綻している。諸写本に従い sabz-i mā'il bi-zardī, rišah dār という本文を再建した [AA Ms. A: 38v; AA Ms. B: 45v; AA Ms. C: 34r]。(M)

60 底本にあるこの表題は、写本にはない [AA Ms. A: 39r; AA Ms. B: 46r; AA Ms. C: 34r]。また、底本の注においても諸写本にないことが示唆されており、この箇所の表題の存在はきわめて疑わしい。ただし、直前の表を挟んで、その前が調合香料について述べているのに対して、これより後はその原料となる香料に関する記述であり、本文の内容は変わっている。なお、底本が参考にしたデリー版石版本にはこの表題が見られる [AA D: 64]。以上のことから、本訳注においては、この表題を保持する一方、これが元来存在しなかった可能性を括弧によって示した。(W)

す。その中に蜂が見つかることもある。イブン・シーナー (Pūr-i Sīnā) の選んだ説によれば、<I, 92> 海底で温泉が湧き出していて、竜涎香はそこから滲み出てきて、波のはたらきによって岸边に打ち寄せられるものだという。新鮮なものには湿り気があり、太陽光によって乾燥して、様々な色になる。【湿り気】 少なければ白く、多ければ黒く、ほどほどであればピスタチオ色と黄色である⁶¹。最上の竜涎香は灰色である。多くの脂が何層にもなっており、折ると黄色の混じった白色が見える。白く、軽く、脆いものほど質が良い。次いでピスタチオ色、その次にケシ色 (ḥaṣḥāṣī) と呼ばれる黄色のものである。最も悪いのは黒い色味のものであり、それは十分に火にかけなければ燃えない。欲深い商人たちは口ウとマンダル (mandal) とラーダンその他に混ぜ込むが、誰もがそれを見抜けるわけではない。

マンダル 死んだ魚の腹から得られる竜涎香である。香りは乏しい。

ラーダン これもアンバル【竜涎香】と呼ばれる。キプロス (Qubrus) およびキースース (Qīsūs) (キストゥース (Qistūs) と呼ばれる) の境域に生える木から取れる⁶²。その葉には湿り気がある。山羊が放牧にいくとき、大腿部の毛や蹄にそれが付着し、乾く⁶³。毛に付着したラーダンの方が、質が良いと見なされる。緑がかった色で、芳しい香りを発する。蹄に付着したものの方が、質

61 Blochmannはこの文を、竜涎香の品質と色との関係を説明したものと解し、the white is the best, and the black is the worst; the middling sort is pistachio-coloured and yellow と訳している [AA (Etr.): I, 83]。しかし本文は az kam-tar 「より少ないことにより」、biṣ-tar 「より多いことにより」とあることから、竜涎香に残る湿り気が記述の焦点であると解した。(M)

62 Blochmannは Qīsūs はキオス (Chios) 島を指すと解する。なお、qīsūs には他に 'aṣṣaqah (キツタ) の仲間、qistūs はハンニチバナ科の植物または地中海地方で生育するその種の植物を指すという意味がある [Mu'in 1342-52 Sh.: qīsūs; qistūs]。(W)

63 日本ではラブダナム (labdanum) という名称でも知られる。ハンニチバナ科ゴジアオイ属 (Cistus ladaniferus) の植物、あるいはその葉や茎から採取される樹脂を指す [Lev & Amar 2008: 194-195]。また、Dioscorides によると、ヤギがラーダン (ladanum) の葉を食べる際、顎鬚や腿にその植物の粘着質の樹脂が付着するので、それを採取して濾し、球状にまとめて保管する、という [Dioscorides (Etr.): 67]。FJ でも、ラーダンはヤギの好物で、顎鬚に付いたものの方が大腿部に付着したものよりも品質がよいとされる [FJ: I, 474-475]。(W)

が悪いと見なされる。一部の人々は、その木に紐を付け、それに付着するものを集め、沸騰した湯に入れて精製し、円盤に仕上げる。

樟脳 ヒンドとチーンの海の【沿岸の】山地にある大きな木であり、100人以上の騎兵が木陰に入れる⁶⁴。樟脳はその木の幹と枝にできる。夏には涼を求めて蛇がたくさんこの木に巻きつくが、それによって見分けがつくので、矢で印をつけておき、冬になると目当ての樟脳を手に入れると言われている。その木の周りにはユーズ⁶⁵が集まり、その木を好むゆえにほとんど離れない、と言う人もいる。木材の中から塩のかけらのようなものが生じることもあれば、外から樹脂のようなものが出てくることもある。木から流れ出て、しばらくすると固まることもある。地震や荒天が多い年にはより多く流れ出る。様々なものがある。その最上のもは、リヤーヒー⁶⁶とファンスーリー⁶⁷である。二つの名で呼ばれ

64 Ibn al-Baytār が伝える Ibn Wāfid の説に同じく「ヒンドとスィーンの海の山々に樟脳の木々があると言われている」とことと、本書で後出する天災の多発する年に樟脳が多い旨の記述が見られる [JM: IV, 42]。 (W)

65 ユーズは西アジアにおいてイスラーム時代以前から狩猟に使われたネコ科の動物で、一般には馴化の容易なチーターを指すとされる [藤井 1990; Allsen 2006: 73-82]。ムガル帝国におけるユーズの狩猟での利用については、Akbar 時代の事例に加えて Ġahāngīr が度々言及している [AA: I, 206-207; JN (A): 206, 245-246, 281; JN (T): 238, 277-278, 318-319]。また Ġahāngīr は、本来黒いはずの斑点が灰色で、体は灰色みがかったいる「白いユーズ」すなわちアルビノを献上されたことがある [JN (A): 66; JN (T): 80]。なお、Thackston は JN に見られる yūz と ċitah をそれぞれ leopard、cheetah と訳し分けるが、AN では、yūz について「ヒンド語で ċitah と呼ばれる」と述べられている [JN (Etr.)(Thackston): xxv n.34; AN: II, 121]。 (W)

Ibn al-Baytār は Ibn Sīnā の説として、豹たち (numūr) がこの木に寄り添うために、(人間が) 片時でもそこに近づくことができない、と記述している [JM: IV, 42-43]。 (M)

66 底本は RBAḤY と作るが、Ms. A, Ms. B は RBbAḤY とタシュディードを加え、Ms. C は RBAĠY とする一方 [AA Ms. A: 39v; AA Ms. B: 46r; AA Ms. C: 34v]、底本の校訂注には以上のいずれとも異なる RYAḤY, RṢAĠY という異文があがるなど、有意の判断を得られない。とはいえ、このくだりが Ibn Baytār の書物に拠っていることは明らかであるから、そのテキストにある RYAḤY の語形を採り、Ferrand および Tibbetts に従い、Riyāhī と読んでおく [JM: IV, 42; Ferrand 1913-1914: 288; Tibbetts 1971: 490]。次行に現れる「リヤーフ」も同様に解釈した結果である。 (M)

67 底本は QYṢWRY と作り、諸本も一致するが、後出の QYṢWR については Ms. C が FBṢWR との異文を呈する [AA Ms. C: 34v]。しかしこのくだりが Ibn Baytār の書物に拠っていることを踏まえて、そのテキストに従って底本のテキストを改め、Faṣṣūrī および Faṣṣūr と読んでおく [JM: IV, 42]。なお以下に紹介されるファンスールの比定説を踏まえれば、同地がサランディープ (セイロン) に近いという説は全く不可解であ

るが、実のところ同じものである。リヤーフという名の支配者がサランディープの島の近くのファンスールという地において初めて得たと言われている。一部の書物によれば、雪のように白いものだという。この驚くべき書物の著者は自分の手で<I, 93>木材から【樟脳を】取り出したことがあるが、まさにそのようなものであった。しかし、イブン・バイタール⁶⁸は、輝くような赤色で昇華を経ると白くなる、と言う⁶⁹。実際に、ある種の樟脳はそのようなものである。それがあらゆる種類の樟脳のうちで、最も純粹で、白く、薄く、きれいで、大きい。次いでカルクーイー (qarqūyī) で、それは濁った鈍色 (ḡalīz-i tīrah-gūn) である。それに続いて、小麦色のカウカブ (kawkab) がある。そして、あらゆる樟脳のなかで最も低級のものはバルース (bālūs) で、木片が混ざっている。どの種類の樟脳も、昇華を経るときれいになり、白くなる。また一部の書物で

る。おそらくこれは本書の著者に帰される認識ではなく、Ibn Baytārが引く「(樟脳は) Sarandīb島のFaṣṣūr地方に産する」[JM: IV, 42] という説を踏襲したにすぎないものであろう。(M)

Blochmannは“Fansūrī according to Marco Polo. Fansūr is a state in Sumatra”との注を付す[AA (Etr.): I, 84]。家島彦一によると、Faṣṣūrは、オマーンからインド、スリランカを経由して東方に航海するダウ船が目指した要地で、龍腦香の名産地(al-kāfur al-Faṣṣūr)として広く知られた。一般には、Ibn Ḥuldāḍbihが伝えるBālūsと同じで、現在のスマトラ島西海岸のバルス(Barus)に比定されている。Faṣṣūrに関する情報は『インドの驚異譚』に多く含まれ、それらの情報から判断して家島は「ファンスール(半島・島)はスマトラ島の北西海岸、ラームリー地方の南境に広がるバロス地方とその近隣の島々——バニヤ諸島、スメルエ島やバニヤク諸島——を含み、その中心港市はバルス(バルス・ナガラ)であった」と述べる[KAH (Jtr.) I, 138-139]。Ḥudūd al-‘Ālamによると、Faṣṣūrは海上交易の盛んな大きな町で、「そこから大量のcamphorがもたらされる」という[HA: 64-65; HA (Etr.): 87]。なおFaṣṣūrとBarusが同じ場所を指す地名であることについてはPiresが記録している[Pires (L): I, 161; II, 409; Pires (Jtr.): 287-288]。(W)

⁶⁸ Ibn al-Baytār al-Mālaqī (d.1248) はスペイン・マラガ生まれの薬学者・植物学者。セビリヤでAbū al-‘Abbās al-Nabātī、‘Abd Allāh ibn Ṣāliḥ、Abū al-Ḥaḡḡāḡに学んだ。1220年頃北アフリカに渡り、おそらく小アジアとシリアを経てカイロに落ち着き、アイユーブ朝スルターン al-Kāmilに仕えた。その著作としては、とくにAl-Ġāmi‘ li-mufradāt al-adwiya wa’l-aḡdīya (『薬物栄養大全』) が有名である。同書は、地中海沿岸各地で採集された薬用植物をはじめとする動植物および薬用鉱物1400種あまりについて、彼自身の研究成果に加えて、150人超の先人たちによる記録も併せて纏められたもので、その後の中東の薬物学に多大な影響を与えた[Vernet (El2)]。(W)

⁶⁹ これにあたるIbn al-Baytārの記述は次のものであろう：「(リヤーヒーの) 色は輝きがあり、これを昇華させると白い樟脳ができる」[JM: IV, 43]。(M)

は、木から取れるものはジャウダーナ⁷⁰、またはビーム・セーニー⁷¹と呼ばれる、と書かれている。減少を避けるために、大麦や丸胡椒や赤い実 (surḥ dānah) と一緒にしておく。ユーナン人は樟脳を第三等の冷性のものと見なすが、ヒンド人は熱性と考える。

ズルンバードと他のものを混ぜ合わせて作られる【樟脳まがいの】ものは、チーニー (čīnī) と呼ばれる。「死んだ樟脳」とも言う。白いズルンバードをよくすり碎き、牛か水牛の乳でできた酸味のあるドゥーグ⁷²に混ぜ合わせる。4日目に新鮮なドゥーグと混ぜて、泡が出てくるまで手で強くかき混ぜ、それを取り出す。少量の樟脳をその中に入れ、小箱に流し込み、しばらくの間穀物倉に置いておく。時には白い石をよくすりつぶして、【その粉】10ディラムに2ディラムのロウと $\frac{1}{2}$ ディラムのスミレか赤い薔薇の油を用いることもある。まずロウを油と一緒に煮て、その粉末と合わせて練り上げ、二つの石の間に挟んで薄くのばす。固まると、樟脳に似たものになる。細かく碎いて樟脳に混ぜる。他人の損失のなかに自分自身の利益を見出すのである。

じゃ香 シャーフ (šāḥ) とも言う。猫に似ているが猫より少し大きく、顔と鼻が長い、ある動物の発情期の滲出物である。アチェに属するサームトラの港⁷³からもたらされるため、サームトラもの (Sāmtrāī) と呼ばれる。それ

70 ḡawdānah. FJでは、樟脳の種類で、「死んだ樟脳」に対して、香りのよいものを指すという [FJ: II, 1958-1959]。 (W)

71 Bhīm-Senī. 樟脳の種類としてPlattsに言及されている [Platts 1884: 200b]。「ビーム・セーン樟脳」として既出 (AA: I, 85; 本訳注7頁) (W)

72 dūḡ. 泡立ちのあるサワーミルクまたはバターミルクの一種 [Steingass 1892: 545b]。 (W)

73 Ibn Baṭṭūtaが伝えるスマトラ・パサイ王国の都Sumṭraを指すと思われる。この町はスマトラ島北東岸、クアラ・パサイの河口から少し遡った川の左岸に位置し、同じ川の右岸にパサイ (Pasay) の町があった [IB: IV, 230; IB (Jtr.): VI, 394-395, 423]。Samatraが島名としてだけではなく、スマトラ島北部の町の名としても使われていたことについては、1512年のものとされる“Juan Serano”という人物 (M. L. Damesはその名をFrancisco Serrãoだろうと推測する) の航海記に見られる [Barbosa Af (Etr): 226-227; Barbosa (Etr): II, 183n.]。またPiresは一部の人々が「パセー」(パサイ) の町のことを「サモトラ」と呼ぶが、「全島でこれほど誇り高い場所はないので、この島は当市の名で呼ばれるようになり、[市は] 別の名前 [パセー] で呼ばれるようになった」と述べる [Pires (L): I, 142-143; Pires (Jtr): 266]。 (W)

がより質の良いものである。この滲出物は黄色みがかった白である。【この動物の】尾の付け根の下に、小さな木の実ほどの大きさで5、6個の穴が開いた囊がある。7日から15日の間に一度、その囊から取る。 $\frac{1}{2}$ トールチャないしは8マーシャーの重さである。なかには馴れていて身を委ねるものもいるが、多くの場合は尾を檻の間から引き出して、貝殻でそこから静かに掻き出すか、あるいは囊そのものを軽く巧みに絞る。その動物は300から500ルピーで買われる。雄のじゃ香は、囊の上に尿道口がある雌のものよりも良い。熟達した人々が洗浄して使用に供する。そうして初めて最上の香料となる。その匂いは衣服や体に長い間残る。

洗浄の方法にはいくつかある。良いやり方は、少量であれば杯に、さもなければ大きな器に入れ、冷水で30回、温水で3回洗うことである。熱によって少し薄くなり、汚れが<I, 94>落ちる。さらに、固くなるように3回冷水で洗浄する。それからレモン汁で3回洗うと、嫌な匂いが洗い清められる。その後3回冷水で洗い、布で濾し取り、焼き物の杯に入れる。3回薔薇水で洗浄し、杯の内側にそれを塗る。数日の間、夜は、チャンペリーの花、ラーイ・パール、赤い薔薇、あるいはカルナーの花に伏せておき、昼は、白い布をかけて日光にさらしておく、と、湿気が減少する。そこから少量を取って、薔薇水と混ぜて使用に供する。

ガウラー (gawrā) (ペルシア語のカーフのファトゥハ、ワーウのスクーン、ラーのファトゥハ、書かれただけのハー) 黒味がかかった白で、香りのよさにかけてはじゃ香には及ばない。上記の動物に似ているが若干大きな動物の発情期の滲出物である。それもまたアチェの周辺からもたらされる。この動物の価格は100から200ルピーである。

ミード ガウラーと同様のものだが、質が劣る。他のものに混ぜて香りを加える。その動物は多くの国々に産し、その価格は5、6ダームを超えない。上述の動物の乾燥した囊を粉にし、湯で煮て、油が浮いてきたら、それがこの名で呼ばれるのだ、と述べる人々もいる。

沈香 ヒンド語ではアガル（ハムザとペルシア語のカーフのファトゥハ、ラー）という。ある種の木の根である。引っこ抜いたものを地面の下に埋めると、粗悪な部分が腐り、残った部分が純粋な沈香である。誰もがその木をこのようにして用いると述べる人々もいる。古い書物によれば、ヒンドウスターンの中部からもたらされるという。空想の中にしか存在しないという邪説がある。様々なものがある⁷⁴。最上はマンダリー（*mandalī*⁷⁵）である。次いでジャバリ（*ġabalī*⁷⁶）であり、これはヒンディーとも呼ばれる。その香りのゆえに虫（*supuṣ*⁷⁷）が発生することはなく、そのために前者よりも好ましいと見なす人々もいるが、どちらも同等と考える人々もいる。さらに最上の種類のなかには、サマンドゥーリー（*samandūrī*⁷⁸）がある。その次にクマーリー（*qumārī*⁷⁹）、さらにカークリ（*qāqulī*⁸⁰）、バツリー（*barrī*）、キタイ（*qīṭaī*）、そしてチー

74 以下カマーリーについての説明までの沈香の種類に関する本書の記述は、明らかに Ibn Bayṭār が引用する Ibn Sīnā の説の転用である [JM: III, 143]。 (W)

75 [家島 2006: 510-511] で、マンダル産沈香 (*al-Mandalī, al-ūd al-Mandalī*) と呼ばれているものである。家島によると、「マンダルは、おそらく後述するサムンダル (*Samundar, Samandur, Samandarum*) と並んで、ガンジス・デルタ付近に位置した沈香の積出港と考えられる」という。 (W)

76 [家島 2006: 511] では、「ヒンディー (*al-Hindī*)、ジャバリ（*al-Jabalī*）もしくはカーマルーン産 (*al-Qāmarūnī*) と呼ばれる沈香」と分類されている。マンダル産沈香と同じように、アッサム高地の森林地帯からもたらされたものとされる。 (W)

77 衣服や頭に発生する虫で、ヒンディー語で *ḡūn* と言う [*Dihḡudā: supuṣ*]。なお、*ḡūn* は「虱、虱のような小さなもの」を意味する [Platts 1884: 398b]。 (W)

78 FJ では、沈香を産するヒンドの王国の名前として、*Samandūr*（あるいは *Samandr, Samandl, Samandūl*）という地名に言及があり、この読みに従った [FJ: II, 1713]。[家島 2006: 511-513] では、沈香の一種として、サムンダル産沈香 (*al-Samundarī, al-Sumundurī, al-Samundukī, Sawandurī, al-Samudurī*) が挙げられており、サムンダルを「マンダルと同じく、ガンジス・デルタ付近に位置し、アッサム高地で産出する良質の沈香の積出港であった」とする。また家島は、この地を「玄奘の伝える三摩咀咤国 (*Samatata*)」すなわち 7 世紀にグプタ朝に従っていたベンガル地方の国と同一地名ではないか、と述べている。 (W)

79 [家島 2006: 513-514] では、クムル産沈香 (*al-Qumūrī, al-ūd al-Qumūrī, al-Qumārī, al-Qumārī al-Hindī*) と分類される。インドシナ半島のクメールはその北側のチャンパ（占城）と並んで、古くから沈香の名産地として知られた。 (W)

80 [家島 2006: 514] のカークラー産沈香 (*al-Qāqulī, al-ūd al-Qāqulī*)。9 世紀から 14 世紀にミャンマー南部からマレー半島北部にかけて存在した *Qāqula*、または *Qāqulla* と呼ばれた国で沈香を産することが知られていた。 (W)

ニー (*čīnī*⁸¹) である。これはカスムーリー (*qasmūrī*) とも言い、湿っており甘い【香りがする】。より質の悪いものはジャラーリー (*ğalālī*⁸²)、MAYṬAFY⁸³、ラーワーキー (*Lawāqī*⁸⁴)、RYṬALY⁸⁵ である。マンダリーは、いずれの種類も良い。サマンドゥーリーのなかでは、青くて丸々としており、厚く、硬く、みずみずしいものが良い。白みがなく、火を点けると長時間かかって燃える。一方、黒いものの方が好ましいと見なす人々もいる。カマーリーのうちでは、白みのない青で、丸々としており、みずみずしく、火を点けてもなかなか燃え尽きないものが良い。すべてのなかで最も良質なのは、黒くて硬く、重量のあるものである。水の底に沈み、< I, 95 > ひげ根がなく⁸⁶、容易に碎ける。水面に浮くものは質が悪いと見なされる。昔の土豪たちが沈香の苗木をグジャラートにも

81 バッリー、キタイー、チーニーの3つはいずれも、[家島 2006: 515] においてキター産もしくは中国産沈香 (*al-Qiṭā'i, al-Šīnī, al-'ūd al-Qiṭā'i, al-'ūd al-Šīnī*) に分類されるものかとも考えられる。キター産沈香は「中国産 (*al-Šīnī*)」、「内陸産 (*al-Barri*)」とも呼ばれたという。中国南部の海岸に近い南嶺山脈一帯や海南島の森林地帯に産するもので、サンフ (チャンパ) 産のものよりも品質が劣ると言われたと家島は述べるが、本書ではサンフ産沈香についての記述は見られない。(W)

82 [家島 2006: 517-518] で、カラ産沈香として分類されているもので、家島は *Yā'qūbī* が挙げる *Jalālī* を「おそらくカラーキー (*Kalākī, Kalāhī, Kalahī*) の誤写であると考えられる」としている。さらに、これが「*Yāqūt* のカルイー (*al-Qal'i, Ibn Sa'īd* のカラヒー (*al-Kalahī*)、カルヒー (*al-Kalhī*) に同じで、カラ (*Kalah, Qalah*)、カラバール (*Kalahbšār*) で産出する沈香を指している」と述べる。カラはイスラーム時代以前から西アジアの人々に *QLH* の名で知られていたマラッカ海峡に近いマレー半島南岸の港で、マレー半島のみならず東南アジア各地で産出した香辛料薬物および染料類の一大集散地であった。(W)

83 この語を Blochmann は *Māyātāqī* と読んでいるが、その読みは定かでないとしている [AA (Etr.): I, 86, n. 1]。A 写本では MAYṬQY と綴られるが、底本脚注によるとほかにも MALṬAQY, MAYTAQY のヴァリエントがある [AA: I, 94, n. 10; AA Ms. A: 40r]。[家島 2006: 516-517] では、スリランカ北西海岸のマンナール湾に面したマントイに集荷された沈香を、マントイ産、もしくはスリランカ産沈香 (*al-Māntā'i, al-Manṭāwī, al-Silānī, al-'ūd al-Sarandībī*) と分類しているが、これと同種のものかもしれない。(W)

84 [家島 2006: 515-516] で、ルーキーン産沈香 (*al-Lawāqīnī, al-Lawāqī, al-Lawālī, al-'ūd al-Lawāqīnī*) として分類されるもの。Lūqīn とは、後漢の時代に北部ヴェトナムの交趾郡、または交州にあった龍編城の名を音写したものとされる。(W)

85 Blochmann は Riṭālī と読んでいるが、その読みは定かでないとしている [AA (Etr.): I, 86, n. 1]。(M)

86 riṣah-dār na-buwad. Blochmann は「繊維質でない」not fibrous と訳しているが採らなかった [AA (Etr.): I, 86]。(M)

たらした。今日ではチャーンパーネール⁸⁷で見られる。アチェとダナーサリー⁸⁸からもたらされる。古の諸書が言及している諸地方からは、今日、沈香は影も形もない。様々な調合品のなかに混ぜられる。沈香を口にすると喜びをもたらす。大方の人々は焚く香として楽しむ。選りすぐりの沈香をすりつぶして体や衣服に塗る人々もいる。

チャウワー⁸⁹ それ【沈香】の抽出物である。老いも若きも用いる。【抽出の】

87 Čānpānēr. 同時代のペルシア語諸史料にはČānpānērの語形でも現れる。アフマド・シャーヒー朝君主Mahmūd 1世 (r. 1458-1511) は1474年、Čānpānērの城砦を征服した後、この地に都市を造営し、それをMuhammadābādと名付けた [MS: 135-137]。以降この都市はAḥmadābādとならぶ同朝の拠点となり、その時代に建設された大規模なモスク等の遺構が現存する [Burgess 1896: 39-44]。Mahmūd 1世は都市の郊外に庭園を築かせたが、そこに植栽された果樹と花の列挙は本書が伝える内容と重なる部分が多い (以下ラテン文字転写を伴わないものは、本書に言及がある植物である)。果樹：マンゴー、サトウキビ、ブドウ、ザクロ、バナナ、アンブリト・パル、サダー・パル、オレンジ、キルニー (khirmī. サオ)、タール (tār. オウギヤシ)、タールパリー (tārphalī. オウギヤシの果肉か?)、ココナツ、ジャックフルーツ。花：薔薇、セウティー、チャーンペリー、チャンパー、パール、モーンガラー、ジャーイー (gāī. 不詳)、ジュイー (gūī. 本書に見えるジュヒーか?)、ボールサリー、KRNy (不詳)、ケーヴァラー、テートッキー [MS: 137-138]。また同じ史料は、同市の郊外に沈香木ではなく、白檀の群生地があったと伝える。なおその史料の著作当時 (17世紀初頭)、Čānpānērはすでに廃墟と化して「虎と獅子の住処」となっており、白檀の群生地は影も形もない有様であったという [MS: 138-139]。なおこの新首都についてはボルトガル語史料も伝えるところが多く、Barbosa, Castanhedaに比較的詳しい記事が載るが、(後者の当該部分の日本語訳はPires日本語訳の訳注に引かれたものがある)、沈香木や白檀についてはいずれも言及していない [Barbosa: I, 213-214; Barbosa (Etr.): I, 123-125; Castanheda: III, cxxxi, 318-319; Pires (Jtr.): 101-102, n. 12]。 (M)

88 Dhanāsārī. 同じ地名は本書の「提督職の規則」āīn-i mīr-i baḥrに後出する [AA: I, 203]。ナーホダーをはじめとする各種の船員の俸給が各地によって異なることを説明する文脈の中で、この地名はペグーと並んで言及される。BlochmannがDahnāsārīと読んだこの地名をFerrandはテナッセリムに比定した [AA (Etr.): I, 86; Ferrand 1913-1914: 547, 550]。さらにTucciは本書の記述を踏まえて、16世紀南インドの僧侶がペグーの次に訪問したDhanaśrīの島を、Ferrandと同じくテナッセリムに比定した [Tucci 1971: 316, 318]。ここではFerrandとTucciの比定に従い、この地名をテナッセリムにあたるものと解した上で、当の語にはDhanāsārīとの読みを与えておく。 (M)

89 チャウワーは本文中に既出 (本訳注2頁) [AA: I, 83]。Plattsは、チャウワーを、白檀、セイシボク (agallochum)、サフラン、ジャ香、あるいは、竜涎香、サフラン、ジャ香、Abor Tristic (本文後出のシンガールハールか?) の液という、4種類の原料を混合したペーストとする。BKhでは、チャウワーは土曜日に用いられる香料とされ、「ミール・サイイド・ムハンマドのチャウワー」など11種類のチャウワーのレシピが挙げられている。10種類のチャウワーの材料の冒頭には沈香が挙げられているが、他にも多くの素材が用いられており、沈香を用いない「竜涎香のチャウワー」も見られる。また、

規則は以下の通りである。選りすぐりの泥を、綿か米ぬかと合わせてすり混ぜる。良く混ぜたら、小さなガラスの杯【の内側】に、指の高さほどそれを塗り付けて乾かす。そして、1週間湿らせておいた沈香を細かくしてそれに入れて、【上の方に】少しだけ隙間を残す。真ん中に穴がある容器を三本脚の台の上に乘せ、ガラスの杯を逆さにして、その口を【容器の穴に】差し込む。【容器の】下に、水がいっぱい入った椀を置き、ガラスの杯の口に水面が達するようにする。その上で、野の乾燥糞 (pāčak-i datšī) を用いてとろとろと火をおこす。炎が立ったら水で消す。沈香の滲出物が出てきて、抽出物が水の上に溜まる。それを採って、何度か水と薔薇水ですすぐと、煙臭さ⁹⁰ (dūd-zadah-gī) が取り除かれる。より多くすすぐほど、また古くなるほど香りが良くなる。黒色である。仕事を知る一部の者たちは、技を用いて白くする。1 スィールの沈香から、2～15 トーラーが取れる。一部の欲深な者たちは、白檀やアーモンドやその他のものと混ぜて、他者の損失を謀る。

白檀⁹¹ ヒンド語ではチャンダン⁹² (ペルシア語のジームのファトゥハ、隠れたヌーン、ダールのファトゥハ、ヌーン) と言われる。チーンの木である。この永遠の王朝にもたらされ、青々と育った。白、黄、赤の3種類がある。赤を白より冷性が強いと考える人々もいれば、白の方が強いという者もいる。白の

7種類のチャウワーの滴下の方法も紹介されている。従って、本文中のチャウワーとその滴下の方法は、様々なチャウワーやその滴下の方法の一つということになる。なお、BK^h では、チャウワーを油やロウで伸ばして服に塗り込むといった用法も説明されている [BK^h: 7v-9v, 69r-74r; Platts 1884: 447b]。 (N)

⁹⁰ 煙の影響として、煤の色などの可能性も考えられるが、この解釈はBlochmannに従った [AA (Etr.): I, 86]。 (N)

⁹¹ この項目の前半部分は、全体としてIbn Baytārを基にしていると推察される。Ibn Baytārは、白檀はṣīnの木であり、白、黄、赤の3種類があるとするIshāq b. 'Imrānの説を引用している。冷性については、赤が白より強いとするIshāq b. 'Imrān説、白の冷性が最も強いとするIbn Sīnā説を、また、乾性については、赤が黄よりも強いとするIshāq b. 'Imrān説、赤が白より強いとするIbn Sīnā説を紹介している。本文の記述は、「白の乾性が赤より強い」とする部分以外、Ibn Baytārの記述と合致する [JM: III, 89]。 (N)

⁹² čandan. ヒンディー語でも白檀を指して用いられる [古賀・高橋2006: 384b]。サンスクリット語candanaは『チャラカ・サンヒター』にも見える [矢野1988: 322]。 (N)

乾性は赤より強く、赤は黄よりも乾性が強い⁹³。最良のものは油のにじんだような黄色であり、それはムカースィリー⁹⁴と呼ばれる。粉にして体に塗り喜びを得る。また違った方法でも用いられる。

スィラーラス⁹⁵ アラビア語 (Tāzī-zabān) ではマイア⁹⁶と言われる。ルームの木樹脂である。煮立てられてできる上澄みを流体のマイアと、それ以外を乾いたマイアと言う。最上のもは、手を加えなくとも流れ、黄色である。

カランバク⁹⁷ 波状の模様がある (ġawhar-dār) 重たい木で、ズィールバード⁹⁸からもたらされる。未成熟の沈香と考える者もある。<I, 96>その粉は濁った白である。様々な香料に混ぜられる。また、この木で数珠も作られる。

93 この文章で「乾質」「乾いている」と訳した単語は底本では「冷たい」ḥunakだが、写本は全てḥuškであり、写本に基づいて底本を訂正した。Ibn Bayṭārの記述もその趣旨であることについては注91を参照 [AA Ms. A: 40v; AA Ms. B: 47v; AA Ms. C: 35v]。(N)

94 muqāṣirī. BīrūnīのKitāb al-Ṣaydanah fī al-Ṭibbに、白檀の最良のもので、金のような黄色だという記述がある。同書の校訂者は、都市の名前、あるいは東南アジアの地名であるという説や、アッバース朝時代のカリフの後宮における慣習に由来するという説などを挙げている [KṢṬ: 395-396]。(N)

95 NNにも登場し、香料や料理、水の味付けなどに用いられている。編者Titleyはsalārasと読み、liquidamberあるいはstoraxと訳している。Plattsは、西アジア原産のマンサク科の樹木から採れる樹脂 (storax、蘇合香) とする。ヒンディー語では、マンサク科高木ラサマラソゴウコウとその樹脂を指す [NN: 52-54, 64, 68, 107; Platts 1984: 668b; 古賀・高橋 2006: 1355a]。(N)

96 may'ah. 現在のアラビア語では、セイヨウエゴノキ (Styrax officinalis) の樹脂 (storax) を指す [Wehr 1979 (1994): 1097b]。Ibn Bayṭārによると、マイアをルームにある木の樹脂とするのはAbū Ġarīf al-Rāhibである。またKitāb al-Ṣaydanah fī al-Ṭibbには、熱して流体のマイアと乾いたマイアと分離することが記されている [JM: IV, 170-171; KṢṬ: 594]。(N)

97 カランバクは上質の沈香を意味するマレー語に由来する [Dalgado 1919-1921: I, 180-182]。Barbosaはチャンパー (Champa) の名産品として「モウロ人やインディア人之间で大いに取引される商品」であるcalambucoなる良質な香木に言及している [Barbosa: II, 408; Barbosa (Etr.): II, 209-210]。Piresも同様にチャンパーの主力商品としてcalambac (マカオ版ではcalambut) を挙げ、それが「真物の沈香で、しかも、同種の中では最良のもの」で、その様態を「白と黒の木理のある若枝」と説明している [Pires (L): I, 113; II, 390; Pires (M): 142; Pires (Jtr.): 225]。その様態は「波状の模様」とあるという本書の記事に整合するかもしれない。この香木がチャンパーの産であるというこれらの所伝は、カランバクがズィールバードからもたらされるという本書の説明と同じである。(M)

98 字義通りには「下り風」であり、季節風を利用する船乗りの用語。マラッカ、スマトラや、ベンガル湾の北～東側の諸地域を指した [和田 2007: 15 n. 27]。(N)

マラーギール⁹⁹ これも木であり、カランバクに似ているが、それほど重たくはなく波状の模様もない。その粉は赤みを帯びた白である。

乳香¹⁰⁰ 良い香りのする樹脂で、ジャワの港からもたらされる。乾いたマイアだと思える人々もいる。火で熱すると、樟脳のように昇華する。ペルシア語で「海のクンドゥル (kundur-i daryā)」と呼ばれる乳香は、イエメンから産する、良い香りがいい樹脂である。

香りアズファール (azfār al-ṭīb)¹⁰¹ ヒンド語ではナク¹⁰² (ヌーンのファトゥハ、カーフのスクーン、隠れたハー)、ペルシア語では香る爪 (nāhun-i būyā) と言われる。殻 (ḥānah-i ḡānwarī) が二枚合わさって、真珠貝のようなものが出来ている。カンショウを食べるので良い香りになるのである。ヒンドの大海で取れる。また、バスラやバフラインの海にもあり、それは最良と見なされている。紅海でも見られ、紅海産が優れていると考える者もある。黄色油脂で熱する。その後火で熱する人々もいる。粉にして様々な香料に混ぜられる。

99 malāḡir. BKh にも名前が挙げられている。また NN には malākara という香料が登場し、編者 Titley はそれを白檀の一種と解釈しているが、詳細や語釈の根拠は不明である。Dihḡudā は、20 世紀イランの医学者 'Alī Akbar 作 *Farhang-i Nāḡim al-Aṡṡibā* に基づき、サンスクリット語で、白檀を多く産する山の名前とする [BKh: 7v; NN: 54, 63, 64, 103; Dihḡudā: malāḡir]。なお、19 世紀に、オリッサ北東部で最も高い山が Malagir と呼ばれているという記録があるが、白檀との関係性は不明である [Kittoe 1839: 607-608]。(N)

100 乳香は古くから薬用に用いられ、アラビア語・ペルシア語文献における記述も多い。ただし、産地としてはイエメンやアラビア半島が挙げられ、ジャワ産とする記述は見られない。「海のクンドゥル」についても未詳である [JM: IV, 83-86; KṢṢ: 544-545; Lev & Amar 2008: 168-171]。(N)

101 NN では nāhun-i būyā という香料が水の味付けなどに用いられており、編者 Titley は mollusc shells と訳している。Ibn Bayṡār の azfār al-ṭīb の項目では、イエメン、バスラ、バーレーン、クルズムなどが産地として挙げられている。Dihḡudā は、nāhun-i pariyān という別名も挙げており、胃や肝臓の薬として用いられるとする。また、Ibn Sīnā はクルズム産の芳香爪に言及しているという。現在の研究では巻貝の蓋の部分とみなされている。Kitāb al-ṡaydanah fī al-ṡibb の校訂者は、ギリシア語で onix とよばれるものと同じとしている [JM: I, 39-40; KṢṢ: 61; NN: 105; Dihḡudā: azfār al-ṭīb; Lev & Amar 2008: 215]。(N)

102 nakh. NN の翻訳では、nāhun-i būyā とは別のもの (aromatic distillery dregs) と解されている [NN: 105]。ヒンディー語で手足の爪を意味すると同時に、海に産する巻き貝の口のふたおよびそれを焼いて作られる芳香料の一という [古賀・高橋 2006: 706a]。(N)

スガンド・コーキラ (sugandh kōkilā)¹⁰³ ヒンドウスターンにたくさん生えている灌木である。様々な香料に用いられる。

香料についての叙述が一通り済んだので、花の魅惑について少し書き記そう¹⁰⁴。

セウティ¹⁰⁵ 姿は赤い薔薇に似ているが、それより小さく、その真ん中には金色の葯 (ḥurdah)¹⁰⁶ がある。花卉は4枚から6枚である。グジャラートやデカンに多い。

チャンベリー¹⁰⁷ 2種類ある。ラーイ・チャンベリーは5、6枚の花弁を持ち、外側は赤みがかった。チャンベリーはそれより小さく、上の方に赤い線が入っている。その株の丈は1.5から2ガズほどである。地表を這っており、長く平らに小枝がたくさん生えている。1年で花をつける。

ラーイ・ベール¹⁰⁸ ジャスミンに似ており、様々な種類がある。花は単独で (yak-tū) 咲くが二つ以上まとまって咲くこともある。五つでまとまって咲くことが多く、各々のまとまりは独立した一つの花とみなすことができる。その株

103 前半部分の字義はsu-gandh (良い香り) であると考えられる。また、kōkilāはウルドゥー語で*Asteracantha longifolia*, *Capparis spinosa*, *Barleria longifolia*, *Ruellia longifolia* など複数の植物を指す [Platts 1884: 863b]。19世紀にインドで活動した医師 Irvine は、甘い香りのする小さな木の実 (berry) で、香料を作るのに用いられる sugāndh-kōklā と呼ばれるものを記録している [Irvine 1841: 151]。(N)

104 本文にあるとおり、以下の記述は花についての説明に移る。既出の一覧表では「芳香 補遺」と題された部分に対応する。(M)

105 NNでは、white China rosesと訳されている [NN: 108]。ヒンディー語では、バラ科ジャコウバラを指す [古賀・高橋 2006: 1377a]。(N)

106 葯は、おしべの先にある花粉が入った袋状の部分の指す。Blochmannはstamens (おしべ) と訳しているが、後出のśāḥṣahをしべと考え、「欠片、小さなもの」を意味するḥurdahはそれとは異なるものを指していると解釈した [AA (Etr.): I, 88]。(N)

107 Ġahāngīrはチャンベリーについて、インド特有のジャスミンであり、これを原料とした香油が製されるとしており、Rogersはそれを*jasminum grandiflorum*とみなしている。NNの編者 Titleyも同様である [JN (T): 5; JN (A): 3; JN (Etr.) (Rogers): 6; NN: 98]。(N)

108 Ġahāngīrは、ラーイ・ベールを「香りにおいては白ジャスミンに近い。花卉は2-3枚重なり合っている」と形容している [JN (T): 5; JN (A): 3; JN (Etr.) (Rogers): 6]。Plattsは*jasminum zambac* (マツリカ) とする [Platts 1884: 585b]。(N)

は1ガズまで【の高さ】である。葉はレモンに似ているが、やや小さく柔らかい。

モーンガラー¹⁰⁹ ラーイ・ベールに似ているが、それより大きく花弁は100枚以上になる。香りはそれには及ばない。若木でも大きな木になる。

チャンパー¹¹⁰ 円錐形で、指くらの長さである。花弁は10枚かそれ以上つき、【いくつかの花が】まとまって咲く。葯がある。<I, 97>その木は姿が良い。その葉と幹はクルミ (čärmağz) のようである。7年で花をつける。

ケートウキー¹¹¹ 【花の】姿は松のようで、 $\frac{1}{4}$ ガズの大きさになり、花弁は12枚以上である。その香りは優しく心地よい。その若木は6、7年で花をつける。

ケーヴァラー¹¹² ケートウキーに似ているが、その2倍かそれ以上の大きさ

109 NNでは、mūgarāはdouble jasmine (*jasuinum zambac*) とされている。ヒンディー語では、mōgrāがジャスミン科のマツリカを、mōngarāはサフランのめしべを意味する [NN: 104; 古賀・高橋 2006: 1107b, 1108a]。(N)

110 Bāburはこの花を「我々の国のジャスミンより大きく、香りが強い」と伝える。Ġahāngīrは、チャンパーを「非常に繊細でよい香り、サフランの花の形に似ているが、チャンパーの色は白っぽい黄色である。その木は大変均整がとれた姿で、大きく、枝葉が茂って陰を作る。花の時期には、1本の木で庭園中に香る」と形容している [BN (Jtr.): 462; JN (T): 4-5; JN (A): 3; JN (Etr.) (Rogers): 5-6]。NNの編者Titley、ヒンディー語やウルドゥー語辞書は *melichia champaca* (モクレン科キンコウボク) とする [NN: 98; Platts 1884: 441a; 古賀・高橋 2006: 385b]。(N)

111 JNでセウティーとして説明されている植物は、ケーヴァラーと比較されていることから判断して、おそらくAAでのケートウキーのことである。Ġahāngīrは、セウティーを「花はケーヴァラーに似ているが、ケーヴァラーはとげを持ち、セウティーはとげがない。その花の色は黄色っぽい、ケーヴァラーは白い」としている。NNの編者Titleyは、セウティーをscrew pineと訳し、ケーヴァラーより小振りな種類とみなす [JN (T): 5; JN (A): 3; JN (Etr.) (Rogers): 6; NN: 103]。ヒンディー語では、kētakīという語形でタコノキ科のアダンの一種 (*pandanus odoratissimus*あるいは*tectorius*) を指す [古賀・高橋 2006: 261b]。(N)

112 Bāburは、「まことによい香りがする。じゃ香の欠点は乾燥しているという点である。これを「湿ったじゃ香」と云えば云える。まことによい香りを持つ。それ自身まことによい姿をしているが、花の長さは1.5-2カルシュある。その姿は、葦の葉に似た長い葉を持っている。これには刺がある。つぼみのように一ヶ所に密集した外側の葉はやや緑色でかなり刺がある。内側の葉は柔らかくて白い。内側の葉の真ん中に、花の中心部にあるものに似たものがあり、そこからよい香りが出てくる。新しく生えて、まだ幹が姿を現していないものは雄株の葦に似ている。この葉はより平らで、刺がある。幹に相当する部分はまことに不格巧である。根が見えたままである」と伝える。訳語は「ビョウタコノキ」とされる。また、Ġahāngīrは、ケーヴァラーを、「姿形においては(枝葉の)重なりがなく、その香りは濃厚さや強さにおいてじゃ香にも劣らない」と形容している。NNでは、この木は*pandamus odoratissimus*とされている [BN (Jtr.): 462; JN (T): 5; JN (A): 3; JN (Etr.) (Rogers): 6; NN: 103]。ヒンディー語では、kēwārāという語

になり、花卉にはとげがある。生育地が一カ所ではないので、全てが一樣ではない。真ん中に、蜂蜜のような色の髭をつけた一本のしべ (*śāḥṣah*) があり、それも香りがいいわけではない。花は乾いた後でも香りがある。服の中に置いておくと、その香りは長く残る。その木の幹は4ガズほどそれ以上の高さになる。葉はジュワリー¹¹³ のようだが少し長く、三角形でそれぞれの角にとげがある。4年で花をつける。毎年、その根に新たに土をかける。デカン、グジャラート、マールワー、ビハールに多い。

チャルター¹¹⁴ 大きなチューリップに似ている。18枚の花弁を持ち、外側の6枚の花弁は緑、他の6枚の一部は緑で一部は赤、またいくつかは褐色 (*mallah*) で、残りの6枚は白い。真ん中はキンセンカ (*hamīṣah bahār*) のようで、200枚にもなる小さな黄色の花弁があり、赤い丸いものがその中心にある。【枝から】切り離しても5、6日は瑞々しく新鮮である。香りにおいてはスマレに近い。しおれた後は調理して食べる。その木はザクロの木のようなものである。葉はレモンの葉に似ている。7年で花をつける。

グラールのタスピーフ 良い香りを豊かに放つ。花卉は短剣のようなものである。その株の丈は2ガズほどで、4年で花をつける。花輪 (*subḥah*)¹¹⁵ をこれで作ると1週間は瑞々しい。

ボールサリー¹¹⁶ ジャスミンより小さく、その花卉には刻み目がある。乾い

形でタコノキ科のアダンの一種 (*pandanus tectorius* あるいは *odoratissimus*) を指す [古賀・高橋 2006: 262a]。 (N)

113 *ḡuwārī*, *Platts* によると、インドの雑穀 *Andropogon sorghum* あるいは *Holcus sorghum*。ヒンディー語では、モロコシ、ヒエ、コーリヤンなど、ソルグム属の様々な雑穀を指す [Platts 1884: 394a; 古賀・高橋 2006: 512b]。 (N)

114 ヒンディー語では、ビワモドキ科ビワモドキ (*dillenia indica*) を指す [古賀・高橋 2006: 399b]。 (N)

115 *subḥah* は一般的には数珠を意味する。この訳は Blochmann に従った [AA (Etr.): I, 89]。 (N)

116 本書の「果物の館の規則」において「その木、花、果実については説明されている」と記述されている *bhōlsirī* の果樹と考えられる [AA: I, 69, 78: AA (Jtr.) (5): 59, 75, n. 105]。NN では *gum myrtle* と訳されている [NN: 97]。帯気音 *bh* と *m* が交替する可能性があるなら、*Ġahāngīr* が MWLSRY (英訳では *mūlsarī* と表記されている) と呼び、「姿が美しく、均整がとれており、木陰を作る。その花の香りは大変甘い」と形容している

の方が香り高くなる。木はクルミに似ている。10年で花をつける。

スィンガールハール¹¹⁷ クローブのような姿で、軸がオレンジ色である。その葯はケシの実のようである。木はザクロのようで、葉はモモに似ている。5年で花をつける。

クーザー¹¹⁸ 姿は赤い薔薇に似ているが、株はそれより大きく、葉も同様に大きい。5枚の花弁になるものもあれば、100枚の花弁になるものもある。真ん中に金色の葯がある。この花でアビール・マーヤを作る。薔薇水も作る。

パーダル¹¹⁹ 5、6枚の長い花弁を持つ。水を美味しく、いい香りにする。泥と混ぜてとっておき、【生花が】手に入らない時に水に入れる人が多い。葉と木はクルミに似ている。12年で花をつける。

ジューヒー¹²⁰ 細かい花弁を持つ。その蔓は木に巻き付く。3年で花をつける。

ニワリー¹²¹ 単独で咲くライ・ベールのようであるが、株はそれより大きく、葉も大きい。葉や枝を覆い隠すほど花を咲かせる。1年で花をつける。<I, 98>

カプール・ベール¹²² 花弁は5枚で、サフランの花に似ている。永遠を飾り

植物と同じものと推察される [JN (T): 5; JN (A): 3; JN (Etr.) (Rogers): 6]。ヒンディー語では、mōlsirī という語がアカテツ科のミサキノハナ (*minusops elengi*) を指す [古賀・高橋 2006: 1113a]。(N)

117 ヒンディー語では、モクセイ科のインドヤコウボク (*Nyactanthes arbortristis*) を指す。har-singār, hār-singār とも言われる [古賀・高橋 2006: 1347a]。(N)

118 NNにも登場し、種が薬用に用いられている。編者 Titley は rose と訳している [NN: 43, 103]。(N)

119 NNにおいても、この花を水に加えるレシピが紹介されている。編者 Titley は、tree-trumpet flowers と訳している [NN: 52]。ウルドゥー語やヒンディー語では、pātal という語がノウゼンカズラ科で赤い花をつける *bignonia suaveolens* を指す [Platts 1884: 214b; 古賀・高橋 2006: 809b]。(N)

120 ヒンディー語、ウルドゥー語などでモクセイ科の *jasminum auriculatum* を指す [Steingass 1892: 379b; 古賀・高橋 2006: 502b]。(N)

121 ウルドゥー語やヒンディー語では、モクセイ科のマツリカ (*jasminum sambac*)、あるいは *jasminum elongatum* を指すとされる [Platts 1884: 1158a; 古賀・高橋 2006: 746b]。(N)

122 字義上は、「樟脳 (kapūr)」の「ジャスミン (bel)」となるが、ファラング (この場合はポルトガルを含意) という由来も含め、具体的にいかなる花を指したのかは不明

とするこの王朝に、ファラングからもたらされた。

サフランの花¹²³ ウルディービヒシュト月の初旬【4月下旬】に、耕して柔かくした専用の土地で、球根を地中に埋めて、天水で栽培する。その球根は、ニンニクの球根の色をした玉葱状である。アーバーン月の中旬【11月初旬】に花をつける。その茎の高さは約 $\frac{1}{4}$ ガズである。土壌の力の違いによって、二つの芽が出る場合があり、その逆もある。その先端に花が開く。それは6枚の花弁と6本のしべを持つ。まず、非常に瑞々しい3枚のスマイレ色の花弁が、それに似た3枚の花弁を取り巻き、その6枚の花弁の真ん中に3本の黄色のしべがあり、それらが3本の赤いしべを取り巻いている。サフランとは、この後者のしべを指す表現である。金色のしべを、いかさまで混ぜる人々もいる。

以前は、毎日、無理矢理人々を連れてきて、花弁と【黄色の】しべからサフランを選り分けていた。手間賃として塩を与えており、2パラ (pala)¹²⁴を選別した者は、塩2パラを受け取っていた。チャク朝のガーズイー・ハーン¹²⁵の時

である。(M)

123 香料としてのサフランはスパイスの項目に既出である。サフランの花についての Ġahāngīr の描写は、本訳注 (4) を参照されたい [AA (Jtr.) (4): 67, n. a]。 (N)

124 Kašmīr において用いられていた重量単位。この名称については読み方も含め、本文に後出する (本訳注 39 頁) [AA: I, 100]。Abū al-Faḍl は、1パラは Kašmīr での 2 ダームに相当し、さらに、Kašmīr では 7.5 パラが 1 スィール、4 スィールが 1 タラク、16 タラクが 1 ハルワールであると伝える。また、AN での Kašmīr の税調査の描写において、Abū al-Faḍl は、1 タラクは Akbar が定めたスィールでは 8 スィールに相当するとしている。従って、Kašmīr のスィールは Akbar のスィールの 2 倍の重量ということになる。本文中の 10 タラクは 80 アクバルシャー・スィールに相当する。一方 Blochmann は、19 世紀初頭に Kašmīr を訪れた Moorcroft の報告として、1 ハルワール = 16 タラク、1 タラク = 16 スィール、1 スィール = 20 パラ、1 パラ = 3 $\frac{1}{3}$ マフムード・シャーヒー・ルピーであり、1 マフムード・シャーヒー・ルピーが 173.3 グレインに相当するという情報を伝えている。ムガル朝時代のスィールとマンについては、訳注 (1) の注を参照 [AA: II, 570; AA (Etr.): II, 366; AA (Jtr.) (1): 100-101 n. 51, 110-112 n. 70; AN: III, 548-549]。 (N)

125 14 世紀初頭に Kašmīr に進出し、ムスリム政権下で有力になったチャク族の指導者。1527 年には、チャク族の長であった父 Kāḡī とともに、Bābur が派遣した軍と戦った記録がある。1555 年には当時の Kašmīr のスルターン、Ismā'īl Šāh のワズィールとなり、1561 年に Ḥabīb Šāh を廃位して自らスルターンとなった。ムガル朝の Kašmīr への侵攻を度々退けた。晩年は病に苦しみ、兄弟 Ḥusayn Ḥān が実権を掌握して 1562/3 年に即位した。1566/7 年没 [Hasan EI2: Čaks, Ghāzi Khān]。 (N)

代から、11 タラク (tarak)¹²⁶の花を選別に預け、選別の手間賃が1 タラクとみなされ、残りの10 タラクから2 アクバルシャー・スィールの乾燥させた純粋なサフランを召し上げるというきまりになった。つまり、2 アクバルシャー・マンのサフランの花から、2 スィールの純粋なサフランを召し上げていた。世界の王は、3 回目にカシュミールを訪れた際にこのきまりを廃したので、大いなる安寧が訪れた¹²⁷。

1 回球根を土に埋めると、6 年間花をつける。しかし、毎年土を耕さねばならない。1 年目と2 年目に少しずつ花が増え、3 年目で成熟に達する。6 年を過ぎると、その球根を土から取り出さないと腐ってしまう。掘り返して他の場所で栽培を行うしかない。もとの土地は、次の5 年間はそのまましておく。多くは、マルラージュ (Marrāġ)¹²⁸に属するパンプル地区 (mawḍa'i Panpūr)¹²⁹で栽培されている。およそ12 クローフにわたってその畑がある。パラスプル郡 (parganah-i Paras-pūr)¹³⁰の、カムラージュ (Kamrāġ)¹³¹側のアンダルコール (Andarkōl)¹³²近辺でも、1 クローフほどにわたって少し栽培されている¹³³。

ヒマワリ¹³⁴ 円形で平たく、大きくて、花卉は数多い。常に太陽のほうを向

126 Kašmīrにおいて用いられていた重量単位。前出注124を参照。(N)

127 Akbarの3度目のKašmīr訪問は、1597年5月から9月にかけて行われた。この滞在中にサフランの生産・売買に関する旧弊が改められたことは、ANにも記録されている。なお、サフランの対価として塩が支払われる慣習は、Ġahāngīrの時代にも見られたという [AN: III, 727; AN (Etr.): III, 1087-1088; JN (T): 358; JN (A): 315]。(N)

128 Kašmīr盆地の南東側をさす呼称。Marāġと表記される場合が多い [AA: II, 571; AA (Etr.): II, 365, 367; Hasan 2005: 220]。(N)

129 Srinagar市の南東20kmほどに位置する都市とそこを中心とする地区。Ġahāngīrの治世においても、Kašmīr産のサフランの大半がこの付近で栽培されており、毎年500マンのサフランが収穫されていたという [JN (T): 55; JN (A): 45; JN (Etr.) (Rogers): 92]。(N)

130 Srinagar市の北西に位置する地区。(N)

131 Kašmīr盆地の北西側を指す呼称 [AA: II, 571; AA (Etr.): II, 365, 367; Hasan 2005: 220]。(N)

132 Srinagar市の北西20kmほどに位置する都市。(N)

133 ここまでは芳香のある花についての詳説である。本文は何の説明もなく次の詳説に続くが、以下は既出の一覧表の表題にあるごとく、「色彩の良い」花についての詳説である。(M)

134 āftābī. 既出の一覧表では「太陽の花」gul-i āftābとして言及されている [AA: I, 89]

く。その株は3ガズまで成長する。

カンワル¹³⁵ 2種類ある。第一は、至高なる太陽が煌めく時に開花し、太陽の推移する方向に花の面を向け、日没とともに花を窄める。シャカーイク¹³⁶に似ているが、この花は白色がかった赤色である。またその花卉は6枚より少なくなることはない。その内側には黄色のしべが複数あり、その真ん中に円錐の形をした突起があるが、円錐の基部のほうが上になっている。この花の実である種が複数、ここにできる。第二は、花卉を4枚備えた白い花である。月の輝く時に、第一の花と同じように開花し向きを変えるが、この花が窄むことはない。<I, 99>

ジャアファリー¹³⁷ 円形で見栄えが良い。花卉を100枚以上つけるほどに成長する【ものもある】。花卉が5枚のものと100枚のものがある。この花の100枚の花卉は、2ヶ月にわたり瑞々しいままである。その樹高は人の背丈ほどになる。葉は柳¹³⁸の葉に似ているが、こちらのほうにはギザギザ¹³⁹がある。2ヶ月

(本訳注11頁)。(M)

135 既出の一覧表では「カンワルの花」として言及されている [AA: I, 89; 本訳注11頁]。The lotus, *Nymphaea nelumbo*, or *N. alba* [Platts 1884: 856a-b]、スイレン科水草オオスイレン (*Nymphaea nouchali* / *N. pubescens*) [古賀・高橋 2006: 179a]。Ġahāngīr は Guḡarāt への道中で目にしたカンワルに関連して次のように記している。「nīlūfar (ヒンドの言葉で kamōdinī と呼ばれる) の花が咲いていた。白、青 (kabūd)、赤の三色があった。これ以前、青と白のは見たことがあったが、赤いのはこれまで見たことがなかった。【中略】 kanwal の花は kamōdinī より大きく、その色は赤みがかった。私は Kaśmīr で100枚の花弁のある kanwal も見たことがある。kanwal は昼間に開花し夜間に窄むこと、これとは逆に kamōdinī は昼間に窄んで夜間に開花することは決まっている」 [JN (T): 235; JN (A): 204]。(M)

136 šaqāyiq. この語は単体ではヒナゲシを意味するが、「ヌウマーンのシャカーイク」という連語ではアネモネを意味するなど、別種の植物を指すことがある。本文のシャカーイクがそれらのうちいずれを意味しているのかは不明である。なお *Iršād al-Zirā'ah* に言及があり、その性質と有用性はチューリップ *lālah* と同様である、とされている [IZ: 215]。(M)

137 The yellow flower *Linum trigynum* (syn. *gul-i ašrafi*) [Platts 1884: 382a]。Ġahāngīr は Kaśmīr の花の一つとして言及している：「ġa'farī の花は大きく、香りが良い。その株は大きなものは人の背丈を越える。しかし数年に一度、大きくなって花をつけ、開花したときに、虫が現れて、その花卉に蜘蛛のように幕を織り掛けて、弱らせて、草の株を枯らしてしまうことがある」 [JN (T): 340; JN (A): 299]。(M)

138 bid は既出であり、いずれも「柳」と訳した [AA: I, 75, 79, 85; AA (Jtr.) (5): 70, 76; 本訳注8頁]。(M)

139 kungirah. 「刻み目、歯車の歯」を意味する語であるが、Blochmann が「ジグザク模様のある」(indented) と解していることを参考にして訳した [AA (Etr.): I, 91]。(M)

で花をつける。

グドウハル¹⁴⁰ ĠWĠASW¹⁴¹のチューリップに似ている。花卉は数多く、その株の丈は2ガズほどあるいはそれ以上になる。その葉は桑に似ている。2年で花をつける。

ラタン・マンジャニー¹⁴² 花卉を4枚備えた花で、ジャスミンより小さい。その樹と葉はラーイ・ベールに似ている。2年で花をつける。

ケースー¹⁴³ 花卉を5枚備えた花で、花卉はいずれも獅子の爪のかたちに似ている。その真ん中には黄色の舌状部がある。その樹はきわめて大きい。あらゆる荒野で花をつけ、優美さの炎が世界を覆う。

カネール¹⁴⁴ その花は長く咲き続ける。見た目は良いが、毒がある。この花

140 guīhalに同じ。The shoe-flower, the plant *Hibiscus syriacus* [Platts 1884: 909a]. アオイ科低木ムクゲ (*Hibiscus syriacus*) [古賀・高橋 2006: 348a]。Bāburはこの名称を、ハイビスカス ġāsūn に対するインドでの別称と説明しており、校訂版のテキストにはこの単語を gadhal と読ませる母音記号がある [BN: 462; BN (Jtr.): 461-462]。なおアクバル時代に作成された *Bābur Nāmah* ペルシア語訳の挿絵つき写本には ġāsūn の写生画を含むものがある [Randhawa 1983: 135]。(M)

141 詳細不明。似た綴りの単語として lālah-i ĠWĠAŠY / ČWĠAŠY / ĠWĠAŠY が史料に見え、いずれも lālah-i čawġāsī (黒いチューリップの一種 [Dihḥudā: lālah-i čawġāsī]) にあたり、Alvi & Rahman によると red poppy (*Papaver orientale*) のことだというのが [Alvi & Rahman 1968: 101]、本文の語形 ĠWĠASW との関係は不明。なお čawġāsī については Ġahāngīr が Kašmīr の花の一つとして言及している: 「Kašmīr の建物はすべて木材で建てられている。二階建て、三階建て、四階建てが建てられている。その屋根には土を敷き詰めて、čawġāsī のチューリップの球根を植えてある。毎年、春の季節には開花し、このうえなく見事な眺めとなる」 [JN (T): 340 (ĠWĠAŠY); JN (A): 299 (ČWĠAŠY)]。Kašmīr において家屋の屋上でチューリップを栽培することについては本書にも記事がある [AA: I, 562]。また Kašmīr で春に咲く「最上級のチューリップ」として lālah-i čawġāsī が Awrangzīb 時代の史料にも在証される [AlmN: 821]。(M)

142 Platts には花の一種として ratn-manjarī (字義上、ratn (宝石) の manġarī (蕾) となる) が立項されているが、本文のラタン・マンジャニーとの関係は不明 [Platts 1884: 587a]。(M)

143 テースー iēsū、パラス palās (いずれもマメ科ハナモツヤクノキ *Butea frondosa*) の花のこと [Prasād 1989: 267b; Platts 1884: 267a, 367a; 古賀・高橋 2006: 540b, 800b]。(M)

144 Fragrant oleander or rose-bay, *Nerium odorum* (the bark and root are poisonous; the leaves are used in native medicine) [Platts 1884: 857a]。キョウチクトウ科低木キョウチクトウ (夾竹桃) [古賀・高橋 2006: 191b]。Bābur もこの花に言及しており、花卉が5枚であるとの説明は本書と同じである [BN: 462; BN (Jtr.): 462]。アクバル時代に作成された *Bābur Nāmah* ペルシア語訳の挿絵つき写本にはカネールの写生画を含むものがある [Suleiman 1970: plate 86; Randhawa 1983: 135]。また Ġahāngīr は、1607年5月、カー

を頭に付けた者はみな、戦いに斃れる。5枚の花弁を備えるものがほとんどである。そしてその枝には花が数多くつく。【株は】2ガズ以上にまで成長する。1年で花をつける。

カダム¹⁴⁵ 鷹の頭被¹⁴⁶に似ている。その葉と樹はクルミのごとくである。

ナグ・ケーサル¹⁴⁷ 赤い薔薇と同様、5枚の花弁を備え、花粉¹⁴⁸がある。その葉と樹はクルミに似ている。7年で花をつける。

スルパン¹⁴⁹ ゴマの花に似ている。また真ん中には黄色い葯がある。またその株はヘンナー¹⁵⁰に似ており、その葉は柳に似ている。

ブルへの途上でカネールの群生を見つけ、本書の所伝を知ってか知らずか、この花の花束を頭に装着するよう同行の兵士たちに命じた：「カネールの花はモモの花の一種で、彩りと華やぎの極みにあり、Hindūstānの地でこの花はいつも咲き、実をつけるが、この花が河床のあちこちにあった。同行していた騎兵・兵士に、この花でできた花束を頭の上に付けるように。花を頭の上に付けていない者については、その者のターバンを取り去るように、と命じた。何と素晴らしい花園ができたことか」[JN (T): 57; JN (A): 47]。(M)

145 kadambに同じ。The tree *Nauclea cadamba* [Platts 1884: 821a]. アカネ科高木クビナガタマバナノキ (*Nauclea cadamba* / *Anthocephalus cadamba*) [古賀・高橋 2006: 189a]。kadambの語は『チャラカ・サンヒター』にも見える [矢野 1988: 330]。(M)

146 tumāgah. 狩りに用いる鷹の目隠し帽を意味する、このモンゴル語起源の単語については [Doerfer 1963-1975: I, 257-259]。いわゆる *The Rasulid Hexaglot* にもモンゴル語としてこの単語がアラビア文字で綴られており、その対訳がアラビア語 (qalansuwat al-ġāriḥ 「肉食鳥の帽子」)、ペルシア語 (kulāh-i ġānwar 「猛禽の帽子」)、トルコ語 (qūš bāši 「鷹の帽子」) によって示されている。なお tumāgah にあたる箇所は写本に汚損があり、Golden はこれを TMGAG と復元しているが、写真版には語末の G と H が視認できるので、Doerfer に記録された語形である tumāgah ないし tūmāgah を導くことが可能であろう [Golden 2000: 230, plate Ms. p. 200]。またこの単語が鷹狩りの用語として、ペルシア語の kulāh、ヒンディー語の iōpī (いずれも帽子を意味) と同義であることについては [Phyllott 1910: 343]。(M)

147 A small tree with fragrant blossoms, *Mesua roxburghii* or *ferrea* [Platts 1884: 1116b]. オトギリソウ科小木セイロンテツボク (*Mesua ferrea*) [古賀・高橋 2006: 720b]。『チャラカ・サンヒター』にはこの単語のサンスクリット語形 nāgakeśara が見える [矢野 1988: 316]。(M)

148 darrah-dār. Blochman は darrah を雄蕊 stamen と解しているが、この語は微細粒を意味すると考えられるので、従わなかった [AA (Etr): I, 91]。(M)

149 The poon-tree, or Alexandrian laurel, *Calophyllum inophyllum* (syn. sultān-čampā) [Platts 1884: 652a]。(M)

150 hinnā. The plant *Lawsonia inermis*, Egyptian privet or Indian myrtle, henna (used for tying the hands and feet and hair) [Platts 1884: 482a]。その葉は染料に用いられる。(M)

スィリー・カンディー¹⁵¹ チャンベリーのごとくであるが、小ぶりである。
2年で花をつける。

ヘンナー 4枚の花弁をつけ、ナーファルマーン¹⁵²と同じ姿である。株によってさまざまな色の花が咲く¹⁵³。

ドゥーパフリヤー¹⁵⁴ 小さい円形の花で、キンセンカに似ている。正午に開花する。その株の丈は2ガズほどである。

ブーン・チャンパー¹⁵⁵ スイレンに似ている。花弁を5枚備えている。その軸は杖のごとくである。洪水が鎮まった土地に生える。その上に【咲く花】は1つだけである。

スダルサン¹⁵⁶ ラーイ・ベールほどの大きさである。その内側には黄色のしべがある。その株はユリに似ている。

セーンバル¹⁵⁷ 5枚の花弁を備えており、花弁1枚の長さは10指尺¹⁵⁸、幅は3指尺である。

ラタン・マーラー¹⁵⁹ 小さい円形の花である。この搾り汁を煮立てて、礬類¹⁶⁰

151 詳細不明。(M)

152 *nāfarmān, Iršād al-Zir'ah* に言及があり、天秤座および蟹座の月に播種、牡牛座の月に収穫、その花の色は黄色・白色・薔薇色・土色、という [IZ: 221]。FBS は *tāg al-mulūk* (とりかぶと) に同じとする [FBS: VIII, 7666]。(M)

153 原文 *dar har būtah rang-ā-rang bi-šikif-ad* は「いずれの株でも色とりどりの花が咲く」と解することもできようが、ヘンナーの花の実態に即して、訳文のごとくとした。Blochmann も同様の解釈をとっている [AA (Etr.): I, 91]。(M)

154 *A kind of flower, Pentapetes phoenicea* [Platts 1884: 529b]。ドゥーパフリヤーは「二刻の」即ち正午を意味する。時間の単位としての刻 *pahr* については [AA (Jtr.): (3): 131, n. 50] を見よ。(M)

155 *bhūmi-čānpak* に同じ。The plant *Kaempferia rotunda* [Platts 1884: 197a]。(M)

156 *su-daršan* 「見目良き」が元来の語形。The rose-apple, *Eugenia jambu* [Platts 1884: 645b]。(M)

157 *sēmāl* に同じ。The silk-cotton tree, *Bombax heptaphyllum* [Platts 1884: 712b]。(M)
パンヤ科高木キワタノキ; インドワタノキ (*Bombax malabaricum*) [古賀・高橋 2006: 1376b]。(M)

158 指尺 *angūšt* については [AA Jtr. (1): 100, n. 50] を見よ。(M)

159 Platts は花の一種との語釈を載せ [Platts 1884: 587a]、これは字義上「宝石の首飾り」を意味するが [古賀・高橋 2006: 1134b]、花の名称としては詳細不明である。(M)

160 礬類 *zāg* の語は既出 [AA: I, 34; AA Jtr. (2): 106]。(M)

とベニバナにまぜたものによって布を染めると、色落ちのしにくい赤色になる。牛脂およびゴマ油をこの花の根とともに煮立てると、紫色になる。これが染色に用いられる。

スーンザルド¹⁶¹ ジャスミンに似ているが、それよりも少し大きい。花卉は5枚か6枚である。その株はチャンベリーのごとくである。2年で花をつける。
<I, 100>

マールティ¹⁶² チャンベリーに似ているが、それよりも少し小さい。内側にはケシの実に似た花粉がある。2年前後で花をつける。

カリール¹⁶³ 3つの花卉を備えた小さい花である。数多く咲き、目にも艶やかである。煮込んで食べられることもあれば、漬け物にされることもある。

ジャイト¹⁶⁴ この花の若木は背の高い樹に育つ。その葉はタマリンドに似ている。

チャンパラ¹⁶⁵ 花束のような形をしている。その樹の葉はクルミに似ている。2年で花をつける。樹皮を煮込むと煮汁は赤くなる。多くの場合、山地にある。その木材は、燈火のごとく燃える。

ラーヒー¹⁶⁶ その株の丈は1ガズ半ほどである。花が咲く前の枝で、ナーン

161 詳細不明。(M)

162 mālatīが元来の語形。The name of several plants and flowers, e.g. *Jasminum grandiflorum*; *Bignonia suaveolens*; *Echites caryophyllata*; *Gaertnera racemosa*, etc. [Platts 1884: 983a]. モクセイ科低木ソケイ (*Jasminum officinale*); モクセイ科低木 (*Jasminum flexile*) [古賀・高橋 2006: 1070a]. mālatīの語は『チャラカ・サンヒター』にも見える [矢野 1988: 307]。(M)

163 karīrに同じ。A thorny leafless shrub, the caper bush, *Capparis aphylla* (which grows in deserts, and is eaten by camels) [Platts 1884: 830b]. フウチョウソウ科低木ケーパー (*Capparis aphylla*) [古賀・高橋 2006: 203a]. その花および実が漬け物になることは既出 [AA: I, 66; AA (Jtr.) (4): 69, n. c]. なお既出の一覧表ではマールティの次、カリールの前に位置する項目として、karn phūlが挙っており、一覧表と本文の詳説の順序は一致しない [AA: I, 89; 本訳注13頁]。(M)

164 The plant *Aeschynomene sesban*, or *Sesbania aegyptiaca* [Platts 1884: 413a]. マメ科草本ツノクサネム (*Sesbania aegyptica*) [古賀・高橋 2006: 504a]。(M)

165 詳細不明。(M)

166 アブラナ科カラシナを差し、ヒンディー語ではsarsōnに同じ [古賀・高橋 2006: 1191b]。(M)

のお供が作られる。ラクダがこの花を食べると、肥え太り、さがりが付く。

カラウンダー¹⁶⁷ ジューヒーに似ている。

ダナンタル¹⁶⁸ スイレンに似ている。きわめて見栄えが良い。蔓性である。

シルス¹⁶⁹ 絹糸のようなしべを持っている。鷹の頭被に似ている。遠くからでも良い香りを放つ。ビーバル¹⁷⁰やバル¹⁷¹の樹には譲るものの、この樹は「樹々の王様」と呼ばれている。ひじょうに大きくなり、建物に用いられる。その幹の内側からは、黒い木材が取れるが、斧は刃が立たない。

カングライー¹⁷² 5枚の花弁を備えており、花弁1枚の長さは4指尺である。美しい外観の花である。1本の枝には1輪しか花が咲かない。

サン¹⁷³ 花束のような形で咲く。これの若木の葉はチャナール¹⁷⁴に似ている。これの若木の皮で縄が作られるが、これはきわめて頑丈である。また綿の花に似た花をつける品種もあるが、これはパト・サン¹⁷⁵と呼ばれる。【その皮から作られる】縄はきわめて柔らかい。

167 この花の果実は食用であり、「甘酸っぱい果物」の一つとして既出 [AA: I, 75; AA (Jtr.) (5): 66]。またNNにはこの果実を用いたジャムのごとき料理のレシピがある [NN: 29v]。(M)

168 詳細不明。(M)

169 The tree *Acacia* (or *Mimosa*) *sirisa*; and its flower [Platts 1884: 653b]. マメ科高木ビルマネム (*Albizzia lebbek*) [古賀・高橋 2006: 1354a]。(M)

170 pīpal. Plattsにはこの名を有する樹木として以下二つが立項されている: The holy fig-tree, *Ficus religiosa* および Long pepper, *Piper longum* [Platts 1884: 295b]. 次注の樹木バルとの関連性から推測すると、本文が指すのは前者か。古賀・高橋も同様: クワ科高木インドボダイジュ (*Ficus religiosa*); コシヨウ科蔓木ヒハツ／インドナガコシヨウ (*Piper Longum*) [古賀・高橋 2006: 829a]。なおこの名称のサンスクリット語形 pippali が黒コシヨウ (*Piper nigrum*) を指す pepper の語源となっていることについては [Yule & Burnell 1903: 697-698]。(M)

171 baī. The banyan or Indian fig-tree, *Ficus indica* [Platts 1884: 151b]. クワ科バンヤンジュ [古賀・高橋 2006: 917b] (M)

172 詳細不明。(M)

173 The plant *Crotalaria juncea*; flax, hemp, *Cannabis sativa* [Platts 1884: 678b]. クワ科草本アサ: インド大麻 (*Cannabis sativa*); マメ科草本サンヘンブ (*Crotalaria juncea*); マメ科草本オオミツバタヌキマメ (*Crotalia mucronata*; *C. striata*) [古賀・高橋 2006: 1308b]。(M)

174 čanār. ペルシア語で「スズカケノキ」の意。(M)

175 paī san. マメ科草本サンヘンブ (*Crotalaria juncea*) [古賀・高橋 2006: 1308b]。(M)

このくにの花々を記述することは、知識の乏しい私による限り、きわめて難しいことであって、参考のためにその一端を記したに過ぎない。イーラーン由来およびトゥラーン由来の花々は、赤い薔薇、水仙、スマレ、青いジャスミン、ユリ、バジル¹⁷⁶、ラナー¹⁷⁷、ズイーバー¹⁷⁸、シャカーイク、タージ・フルース¹⁷⁹、カルガ¹⁸⁰、ナーファルマーン、ハトゥミー¹⁸¹など、数多く生育している。庭園や園地の数々が至る所で目を楽しませてくれている。かつて果樹園では【各種の植物を】取り混ぜて栽培していたものだった。しかしフィルダウス・マカーニー陛下¹⁸²の到来がヒンドウスターンに輝きを放ったときから、通路を構え、

176 rayhān, rayhān-i siyāhは香料の材料の一つとして既出であり [AA: I, 83]、そこでは「黒バジル」と訳したが(本訳注3頁)、rayhānないしバジルの花を使用することの詳細については不明である。(M)

177 ra'nā, 本書初出。Iršād al-Zirā'ahに言及があり、黄色・赤色であること、牡牛座の月に開花することが指摘されている [IZ: 203]。IZの編者は索引でこれを gul-i lādan Tropaeolum majus (キンレンカ)に比定するが、根拠は不明。(M)

178 zībā, Iršād al-Zirā'ahは gul-i zībāに言及して、花卉100枚のものもあるが、6枚のものが標準種、あらゆる花よりも早く咲く、この花の球根の栽培はスイセンと同様である、標準種は乙女座の月に開花するが、花卉100枚のものは水瓶座の月に開花する、とする [IZ: 209]。IZの編者は索引でこれを、赤い薔薇の一種に比定するが、根拠は不明。(M)

179 tāg-i ħurūs, 字義上は「雄鶏の冠」。アマランサスを指す。tāg-i ħurūsの語は Iršād al-Zirā'ahにも在証できる [IZ: 220]。(M)

180 qalğah, 花の名称である一方、ターバンに付ける階級の記章を意味するという [Steingass 1892: 985a; Doerfer: III, 501] が、詳細は不明。(M)

181 ḥaṭmī, ḥaṭmīに同じ。タチアオイ。Iršād al-Zirā'ahは ḥaṭmīについて、医術の諸書で ḥīrīと記される ḥīrūのことであり、温質だという説もあれば冷質だという説もある、とする [IZ: 219]。また Ġahāngūrは1620年3月、Kašmīrへの途上で、ある花を見つけたが、その姿が ḥaṭmīの花と同じであるとの観察を記している [JN (T): 328; JN (A): 289]。(M)

182 ムガル帝国初代君主Bāburの諡号。ティムール朝風の庭園がインドに見られないことにBāburが不満を抱いていたことは、その回想録からうかがえる。そのためBāburは計画的な設計に基づいた庭園をĀgrahのYamnā川左岸、Sikrī, Dhawlpūr, Gwāliyar北郊に造営させた [BN: 482-483, 525, 528, 531, 544, 545, 551, 566, 569, 571; BN (Jtr): 478-479, 519, 521, 522, 525, 539, 540, 546, 563, 566-567, 569-570]。Bāburはこの点で「ティムール朝時代ペルシア風」庭園様式をインドに持ち込んだ人物として建築史学のうえで評価されているが [Koch 1991: 34]、本書の記事は同時代においても新たな造園様式をBāburに帰する認識があったことを示す材料である。Āgrahの庭園は、今日 Ram Baghの通称で知られる庭園遺跡に比定されているが、現存する遺構はĠahāngūr時代に改修された結果である。詳しくは [Koch 1986] を見よ。またDhawlpūrの遺跡については [Moynihan 1988]、Sikrīに現存するBābur造営の階段式井戸(バーオリー)の遺構およびその周辺に確認できる庭園遺構をBāburの庭園に帰する説については [Rezavi 2013:

区画を設けることが始まった。そして心開くような建物の数々、耳奪うようなせせらぎの数々が、全世界を見知った人々さえも驚嘆させたのである。

また、この国の草木で、その花や実や蕾や葉や根などが食べ物や薬になるようなものについての記述は数限りない。ヒンド語の諸書¹⁸³には、全ての品種から葉を1枚取り集めれば、18パールになると説明されている。5スルフが1マーシャーに等しく、16マーシャーが1カルガ(カーフのファトゥハ、ラーのスクーン、ペルシア語のカーフのファトゥハ)、4カルガが1パラ(ペルシア語のバーとラームのファトゥハ)、100パラが1トゥラー(上双点付きターのダンマ、ラーム、アリフ)、20トゥラーが1パールに等しい。現行の秤量ではかれば、96マンとなる¹⁸⁴。また草木の寿命は2ガリー¹⁸⁵以上、1万年以下であり、<I, 101> 高さは1000ジュージャン¹⁸⁶ほどを超えないとも記されている。草木の一生が終わると、その靈魂(nafs)は次の十の物のうちのどれか一つに合体するのだと言われている。すなわち、火、水、風、地、植物、動物、二感生物(dū ḥassah)、三感生物、四感生物、五感生物。

137-138]。(M)

183 本文の当該箇所は、hindī nāmah-hāとあるが、Ms. Aのみ直前にdarを補う[AA Ms. A: 43r]。本訳注はこれを探った。(M)

184 「96マンとなる」のが1パールとも取れるし、上述の18パールとも取れる。Blochmannは前者と解釈しているが、根拠はない[AA (Etr.): I, 93]。なお、マーシャーとスルフとの関係について、本書の中でもさまざまな説明があることについては[AA (Jtr.): (1): 97, n. 43]を見よ。単位どうしの等式について、BīrūnīにはVarāhamihiraに拠って16 māśah = 1 suvarṇa, 4 suvarṇa = 1 pala とする説明[KTH: 78; KTH (Etr.): I, 162]、および「Sind 征服に関する諸書」によって2000 pala=1 bhāraとする説[KTH: 78; KTH (Etr.): I, 163]が断片的に見える。(M)

185 時間の単位としてのghaīについては[AA (Jtr.): (3): 131, n. 50]を見よ。(M)

186 ḡūḡan, ḡōḡanとあるべきだが、本書に後出する発音表示に従う[AA: I, 599]。長さの単位ḡūḡanについては、本書に後出のkurūhに関する一連の説明の中で、1 ḡūḡan が4 kurūhに等しいとある。この説明ではkurūhの導き方にインドの各地方で違いがあることを述べており、「ヒンドの知者」の説によるkurūhの導出は以下の通りであるという: 「皮をむいた大麦8粒を横に並べると」1 angušt. 24 angušt = 1 dast. 4 dast = 1 dānd (dhang) . 2000 dānd (dhang) = 1 kurūh [AA: I, 598-599]。なおanguštからḡūḡanに至るこの単位系は、Šāh Ḡāhān時代末期に帰される業務要領書dastūr al-'amal [DAN: 151v-152r]、およびAwrangzib時代初頭に帰される業務要領書dastūr al-'amalにも見える[DAA: 2r]。なおBīrūnīはVarāhamihiraによって、大麦からkurūhまでの等式を説明しているが、その内容は本書と異なる[KTH: 79-80; KTH (Etr.): I, 166-167]。(M)

参考文献

一次文献

- AA: Abū al-Faḍl, *Ā'in-i Akbarī*. H. Blochmann (ed.), Calcutta, 2 vols., 1867-1877.
- AA D: Abū al-Faḍl, *A'in-i Akbarī*. Sayyid Aḥmad (ed.), Delhi, 1272 A.H. (1855/6) (repr. 'Aligarh, 2005).
- AA (Etr.): H. Blochmann (vol. 1) & H. S. Jarrett (vols. 2, 3) (trs.) (Rev. ed. D. C. Phillott & J. Sarkar), Calcutta, 3 vols., 1927-1949.
- AA (Jtr.)(1): 二宮文子・真下裕之・和田郁子訳「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリ』 訳注 (1)」『紀要 (神戸大学文学部)』40, 2013, pp. 69-118.
- AA (Jtr.)(2): 二宮文子・真下裕之・和田郁子訳「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリ』 訳注 (2)」『紀要 (神戸大学文学部)』41, 2014, pp. 75-120.
- AA (Jtr.)(3): 二宮文子・真下裕之・和田郁子訳「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリ』 訳注 (3)」『紀要 (神戸大学文学部)』42, 2015, pp. 113-151.
- AA (Jtr.)(4): 二宮文子・真下裕之・和田郁子訳「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリ』 訳注 (4)」『紀要 (神戸大学文学部)』43, 2016, pp. 35-73.
- AA (Jtr.)(5): 二宮文子・真下裕之・和田郁子訳「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリ』 訳注 (5)」『紀要 (神戸大学文学部)』44, 2017, pp. 49-88.
- AA Ms. A: Ms. Add. 7652, British Library.
- AA Ms. B: Ms. Or. 2169, British Library.
- AA Ms. C: Ms. Add. 6552, British Library.
- AAB: Asad Beg Qazwīnī, *Aḥwāl-i Asad Beg*. Ms. Fann-i Sawānīḥ-i 'Umrī 41, Andhra Pradesh Government Oriental Manuscripts Library and Research Institute.
- AlmN: Muḥammad Kāzīm, *Ālamgīr Nāmah*. Ḥādīm Ḥusayn & 'Abd al-Ḥayy (eds.), Calcutta, 1865-1868.
- AN: Abū al-Faḍl, *Akbar Nāmah*. Mawlawī Āghā Aḥmad 'Alī Mawlawī 'Abd al-Raḥīm (eds.), 3 vols., Calcutta, 1877-1886.
- Barbosa: Duarte Barbosa, *O livro de Duarte Barbosa*. Maria Augusta da Veiga e Sousa (ed.), Lisboa, 2 vols., 1996-2000.
- Barbosa (Etr.): Mansel Longworth Dames (tr.), *The Book of Duarte Barbosa*. London, 2 vols., 1918-1921.
- Barbosa Af (Etr.): Duarte Barbosa, *A Description of the Coasts of East Africa and Malabar in the Beginning of the Sixteenth Century*, Henry E. J. Stanley (tr.), London, 1866.
- BKh: Anonym., *Bayād-i Ḥwūṣ-bū'ī*. Ms. IO Islamic 828, British Library.
- BN: Ṣāḥīb al-Dīn Muḥammad Bābur, *Bābur Nāmah*. 間野英二編『バール・ナーマの研究

I 校訂本』松香堂, 1995.

BN (Jtr.): 間野英二訳『バーブル・ナーマの研究 III 訳注』松香堂, 1998.

BNL: 'Abd al-Ḥamīd Lāhawrī, *Pādšāhnāma*. Kabīr al-Dīn Aḥmad & 'Abd al-Raḥīm (eds.), Calcutta, 2 vols., 1866-1868.

Castanheda: Fernão Lopes de Castanheda, *História do descobrimento e conquista da Índia pelos Portugueses*. Pedro de Azevedo & P. M. Laranjo Coelho (eds.), Coimbra, 9 vols. in 4 parts, 1924-1933.

DAA: Anonym. *Dastūr al-'Amal-i 'Ālamgīrī*. Ms. Add. 6598 I, British Library.

DAN: Anonym. *Dastūr al-'Amal-i Niwīsandagī*. Ms. Add. 6641 III, British Library.

Dioscorides (Etr.): Pedanius Dioscorides of Anazarbus, *De materia medica*. Lily Y. Beck (tr.), 3rd Revised Edition, Hildesheim, 2017.

FJ : Ġamāl al-Dīn Ḥusayn b. Ḥasan Inḡū Šīrāzī, *Farhang-i Ġahāngīrī*. Raḥīm 'Afīfī (ed.), Mašhad, 3 vols., 1972-1975.

HA: Anonym, *Ḥudūd al-'Ālam min al-Mašriq ilā al-Maḡrib*. Manūčīhr Sutūdah (ed.), Tihṛān, 1340 Sh.

HA (Etr.): do. V. Minorsky (tr.), *The Regions of the World*, 372 A.H.-982 A.D. London, 1937.

IZ: Abū Naṣrī Harawī, *Iršād al-Zir'ah*. Muḥammad Mašīrī (ed.) Tihṛān. 1346 Sh. (Repr. 2536 A.P.)

JM: Ibn Bayṭār, *Kitāb al-Ġāmi' li-Mufradāt al-Adawīyat wa al-Aḡdīyat*. Būlāq, 4 vols., 1291 A.H.

JN (A): Nūr al-dīn Muḥammad Ġahāngīr, *Ġahāngīr Nāmah*. Syud Ahmud Khan (ed.), Ghazeeepore & Ally Gurh, 1863-1864.

JN (Etr.) (Rogers): do. A. Rogers (tr.), H. Beveridge (ed.), London, 1909-1914.

JN (Etr.) (Thackston): do. W. M. Thackston (tr.), Washington, D.C. & Oxford, 1999.

JN (T): do. Muḥammad Hāšim (ed.), Tihṛān, 1359 Sh.

KAH (Jtr.): Buzurg b. Šahriyār, *Kitāb 'Aḡā'ib al-Hind*. 家島彦一訳『インドの驚異譚：10世紀「海のアジア」の説話集』全2巻, 平凡社, 2011.

KŠṬ: Abu Rayḥān al-Bīrūnī, *Kitāb al-Šaydanah fī al-Ṭibb*. 'Abbās Zaryāb (ed.), Tehṛān, 1991.

KTH: al-Bīrūnī, *Kitāb Taḥqīq mā li-al-Hind*. E. Sachau (ed.), London, 1887.

KTH (Etr.): E. Sachau (tr.), London, 2 vols., 1910.

MAI: Mustā'idd Ḥān, *Ma'āṭir-i 'Ālamgīrī*. Āḡā Aḥmad 'Alī (ed.), Calcutta, 1870-1873.

MS: Sikandar b. Muḥammad Maṅghū, *Mir'āt-i Sikandarī*. S. C. Misra & M. Lutf al-Rahman (eds.), Baroda, 1961.

NN: Anonym., *Ni'mat Nāmah*. Norah M. Titley (ed.), Oxon, 2005.

Pires (Jtr.): Tomé Pires, *Suma Oriental*. 生田滋他訳『トメ・ピレス 東方諸国記』岩波書店 1966.

Pires (L): do. Armando Cortesão (tr. & ed.), 2 vols., London, 1944.

Pires (M): do. Rui Manuel Loureiro (ed.), Macau, 1996.

二次文献

Allsen, T. T. (2006) *The Royal Hunt in Eurasian History*, Philadelphia.

Alvi, M. A. & Rahman, A. (1968) *Jahangir: The Naturalist*, New Delhi (Reprint: New Delhi, 1989).

Brand, M. & Lowry, G. D. (eds.) (1985) *Akbar's India: Art from the Mughal City of Victory*, New York.

Burgess, J. (1896) *Muhammadan Architecture of Bharoch, Cambay, Dholka, Champanir, and Mahmudabad in Gujarat*, London.

Dalgado, S. R. (1919-1921) *Glossário Luso-Asiático*, Coimbra.

Das, A. K. (1991-1992) Chinese Porcelain at the Mughal Court, *Silk Road Art and Archaeology*, 2, pp. 383-409.

Dihhūdā, A. A. *Luḡat-nāmāh*. <http://parsi.wiki/>

Doerfer, G. (1963-1975) *Türkische und mongolische Elemente im Neupersischen. Unter besonderer Berücksichtigung älterer neupersischer Geschichtsquellen, vor allem der Mongolen- und Timuridenzeit*, 4 vols., Wiesbaden.

FBS: Ḥasan Anwarī, *Farhang-i Buzurg-i Sulḥan*, 8 vols., Tihṛān. 1381 Sh.

Ferrand, G. (1913-1914) *Relations de voyages et textes géographiques: Arabes, Persans et Turks, relatifs à l'Extrême-Orient du VIII^e au XVIII^e siècles*, Paris.

Golden, P. B. (ed.) (2000) *The King's dictionary: The Rasūlid Hexaglot: 14th century vocabularies in Arabic, Persian, Turkic, Greek, Armenian and Mongol*, Leiden.

Hasan, M. (2005) *Kashmīr under the Sulṭāns*, Delhi.

Hasan, M. (EI2) Čaks. *Encyclopedia of Islam, New Edition*.

Hasan, M. (EI2) Ghāzī Khān. *Encyclopedia of Islam, New Edition*.

Irvine, R. H. (1841) *Some Account of the General and Medical Topography of Ajmeer*, Calcutta.

Kittoe, M. (1839) Account of a Journey from Calcutta via Cuttack and Pooree to Sumbulpur, and from thence to Medinipur through the Forests of Orissa, *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, 91, pp. 606-620.

Koch, E. (1986) Notes on the Painted and Sculptured Decoration of Nur Jahan's Pavilions in the Ram Bagh (Bagh-i Nur Afsha) at Agra. In: Skelton, R., Topsfield, A., Stronge, S. & Crill, R. (eds.), *Facets of Indian Art*, London, pp. 51-65.

Koch, E. (1991) *Mughal Architecture: An Outline of its History and Development (1526-1858)*,

Munich.

- Lal, B. B. (1973) *Indian Archaeology 1969-70: A Review*, New Delhi.
- Lev, E. & Amar, Z. (2008) *Practical Materia Medica of the Medieval Eastern Mediterranean According to the Cairo Genizah*, Leiden.
- Meyer, J. (2015) *Sensual Delights: Incense Burners and Rosewater Sprinklers from the World of Islam*, Copenhagen.
- Moynihan, E. B. (1988) The Lotus Garden Palace of Zahir al-Din Muhammad Babur. *Muqarnas*, 5, pp. 135-152.
- Muʿīn, M. (1342-1352 Sh.) *Farhang-i Fārsī*, Tihārān.
- Phyllott, D. C. (1910) Vocabulary of Technical Falconry Terms in Urdu, Persian, and Arabic, *Journal of the Asiatic Society of Bengal, New Series*, 6, pp. 315-380.
- Platts, J. T. (1884) *A Dictionary of Urdū, Classical Hindī and English*, Oxford.
- Prasād, K. et al. (1989) *Brhat Hindī Koś*, Vārāṇasī.
- Randhawa, M. S. (1983) *Paintings of the Bābur Nāma*, New Delhi.
- Rezavi, S. A. N. (2013) *Fathpur Sikri Revisited*, New Delhi.
- Smart, E. S. (1975-1977) Fourteenth Century Chinese Porcelain from a Tughlaq Palace in Delhi, *Transactions of the Oriental Ceramic Society*, 41, pp. 199-230.
- Steingass, F. (1892) *A Comprehensive Persian-English Dictionary*, London.
- Suleiman, H. (1970) *Miniatures of Babur-Nama*, Tashkent.
- Tibbetts, G. R. (1971) *Arab Navigation in the Indian Ocean Before the Coming of the Portuguese, Being a Translation of Kitāb al-Fawā'id fī Uṣūl al-Baḥr wa'l-Qawā'id of Aḥmad b. Mājid al-Najdī*, London.
- Tucci, G. (1971) The Sea and Land Travels of a Buddhist Sādhu in the Sixteenth Century, Tucci, G. (ed.), *Opera minora. Parte II*, Roma, pp. 305-319.
- Wehr, H. (1979) *A Dictionary of Modern Written Arabic*, Fourth Edition., Wiesbaden (Repr. Ithaca, 1994).
- Yule, H., Burnell, A. C. & Crooke, W. (eds.) (1903), *Hobson-Jobson: A Glossary of Anglo-Indian Colloquial Words and Phrases and of Kindred Terms*, London.
- Vernet, J. (EI2) Ibn al-Bayṭār. *Encyclopaedia of Islam. New Edition*.
- Zebrowski, M. (1997) *Gold, Silver and Bronze from Mughal India*, London.
- 辛島昇 (1988) 「中世南インドの海港ベリヤパッティナム：島夷誌略の大八丹とイブン＝バットゥータのファッタン」『東方学』75, pp. 81-98.
- 黒柳恒男 (2002) 『新ベルシア語大辞典』大学書林.
- 古賀勝郎・高橋明 (編) (2006) 『ヒンディー語＝日本語辞典』大修館書店.
- H・R・ターナー (2001) 『図説 科学で読むイスラム文化』久保儀明訳、青土社.
- 藤井純夫 (1990) 「紀元前4000年紀後半のイラン高原における追込み獵と「ユーズ」の利

用について」『西南アジア研究』32, pp. 1-20.

家島彦一 (2006)『海域から見た歴史：インド洋と地中海を結ぶ交流史』名古屋大学出版会.

矢野道雄 (1988)『科学の名著 第Ⅱ期1 (11) インド医学概論』朝日出版社.

和田郁子 (2007)「インド・ゴールコンダ王国における君主と港市海上交易の関係：スルターン・アブドゥッラー (1626-72) の治世を中心に」『東洋史研究』66 (1), pp. 160-134.

本訳注の作成にかかる研究活動に対しては、公益財団法人三菱財団より、平成28年度三菱財団人文科学研究助成金の支援を得た。